
離れるなんて言わせない！

ちまこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離れるなんて言わせない！

【Nコード】

N5482P

【作者名】

ちまこ

【あらすじ】

桂南高校に通う池戸望には二人の親友がいた。一人は年増女が好きな早瀬智明。もう一人は剣道部に所属する男前、朝倉大輝だ。

ある日、智明は一年先輩の岡田栄介に手紙で呼び出された。複数の恋人を持つ智明がまたトラブルを引き起こしたと思っていたのだが、呼び出しの内容は愛の告白だった。同性愛というものに偏見を持つ望と智明は、岡田の存在を嫌悪する。ただ一人、大輝だけは岡田の肩を持った。そのことがきっかけとなり、大輝が同性愛者であったことを望と智明は知る。そして同性愛に対して理解を示さない

二人から、大輝は離れていった。

果たして取り戻すのは友情か、それとも別の感情か。

変わることを恐れながら、それでも必死で何かを掴もうとする少年達の青臭いラブストーリー。

私立桂南高校は、今年で創立40年になる男子校だ。

学力レベルは県内でも五本の指に入るほど高く、全国でも有名な大学に合格者を多く出す高校としても知られている。歩いて10分のところには昨年まで女子高だった百合丘高校がある。今年から共学に変わったといっても、まだまだ女子生徒が多く通っている高校だ。これらの条件から、桂南高校の生徒は男子校に通っていてもそれなりに彼女を作る事の出来る環境におかれていた。

今年の春、桂南高校に入学した池戸望は、彼女こそ出来ないまでもそれなりに楽しい高校生活を送っていた。

同じクラスには仲の良い友人も出来た。

その一人が、今日の前に座って大きなため息をついている早瀬智明だった。智明は望がこのクラスに入って一番最初に挨拶ではない会話をした男だ。

「お前、彼女いる？」というのが、智明の第一声だった。今まで一度も彼女というものを持ったことのない望は、多少の恥ずかしさを堪えて正直に「いない」と答えた。その素直な物言いに好印象を抱かれて、望は智明に懐かれてしまった。聞きもしないのに始まった智明の彼女自慢は果てしなく続いていき、望はこの時自分の要領の悪さを自覚したのだった。

話を聞くうちに智明が普通ではない好みの持ち主だと判明する。智明の彼女はいずれも全てが20代後半から30代だったのだ。中には人妻もいるらしい。この時に二人の女性と付き合っていると言っていた智明は、現在では一人とは別れ新たに二人の彼女が出来ている。計三人の女性と同時に付き合いを重ねている智明を呆れ半分で少しだけ羨ましくも思ってしまう望だった。

「年上は良いぞ、優しくて甘やかし上手で、しかも包容力がある。」

色気もあるしな。同世代の女の子は我侂が多くて扱いにくい。付き合うなら絶対年上だって」

智明は最初からそう力説していた。その力の込めように少し気持ちが引いてしまった望だったが、今もこうして友達を続けているのだからそれほど悪い奴ではないのだと思っている。

もう一人は朝倉大輝という男で、剣道部に所属する男前だ。男の望むから見てもそう思うので、女性から見てもやはり魅力的なのだろう。知り合ってから大輝が他校の女性とに告白をされることがたびあることを望も知っている。だが望むの知る限り、大輝がそれらの告白を受け入れたことはない。理由は分らないのだが、望の予想では大輝の無口なところが彼女の出来ない原因ではないかと思っていた。普段から大輝はあまり感情を表に出さないためか「真面目」「堅物」といった印象をよく周囲からもたれる男だった。馬鹿話で腹がねじれるほど笑うこともなければ、自分から冗談を披露するようなこともない。自分のことも好んで話そうとはしないためか、望は大輝に付いては未だに何が好きで嫌いなのかも分らない部分が多い。意外につまらない男だと言う女性もいるら良いが、同性からの受けは悪くはない。信用のできる男というのが、桂南高校内での大輝への平均的な評価だった。望にとっては大輝も大切な友人の一人だ。智明と大輝と三人でいる時間が、とても楽しく感じているのだ。

「どうしたんだよ」

朝からずつと深いため息を繰り返した智明を前に、望は椅子を引いてきて座った。智明は自分の席で机に突っ伏している。

無言で智明から手紙を渡されて、望はそれを受け取った。

真っ白い封筒には「早瀬智明様」と書かれている。

手紙を渡されたという事は読んでもいいということだろう。望は遠慮なく封筒の中に入っていた手紙を取り出すと広げていった。

「今日の放課後、体育館の裏で待っています」

手紙には上手とは言えないような字で、そう書かれていた。用件のみを伝える端的な文面だった。

望は顔をしかめる。

「岡田栄介って、誰だ？」

下に添えられた名前を読み上げて、望は智明に聞いた。
がばつと勢いよく起き上がった智明は、じろりと望を見る。

「知らん！」

「・・・一年かな？」

「二年だろ」

背後からの声に望が振り返ると、大輝が望の手の中にある手紙を除き見ているところだった。

「あつ、大輝。おはよっ」

望むが顔を綻ばせる。

「はよ」

大輝は僅かではあったが笑みを見せた。こういう仕草が自分と比べると大人っぽいなと望はいつもの事ながら思ってしまった。

「何？今日は遅いんだな。いつも大輝が一番に来てるのに」

「さっきまで部活のほうに言っていたんだ」

「朝練？」

「いや、今度道場のある武道館が改修工事されるみたいで、その打ち合わせだ」

「へえ、あのボロい武道館、やっと立て直すんだ」

望の言葉に大輝は苦笑いを浮かべた。

「改修工事だ。耐震補強が目的らしい。少しは綺麗になるんだろうけどな」

「なんだー。折角なら立て直せば良いのにな。そしたら体育の授業も少しはましになるかもしれないのにな」

望の暢気な声を上げた。

桂南高校にある武道館は、その使用率の殆どを剣道部と柔道部が占めている。一応体育の授業には剣道も柔道も組み込まれているので一年のうち三ヶ月程度は一般の生徒も武道館を使う事にはなっていた。その建物は高校創立以来あるもので、随分と年季が入っている。防具の匂いと汗の匂いが染み付いた館内は、授業でしか使わない生徒にとっては人気の低い場所であった。

運動自体が苦手な望にとっては、武道館は好んで行きたいと思う場所ではない。それでも目新しい情報に目を輝かせるのは、暇を持て余しているからだろう。

「そんな金がどこにあるんだよ」

智明の低い声が、望に向けられる。

「武道館なんてどうだっていいんだよ」

望とは違い運動神経は良いがスポーツ自体が嫌いな智明は、そんなに会話を切り捨てた。

「それよりも」と智明は大輝に詰め寄る。

「大輝、この岡田って奴知ってるのか？」

智明の問いかけに大輝は頷いた。

「二年の先輩だ。柔道部にいるから顔も知っている」

大輝の言葉に、智明は「げっ！」と声を上げた。

「よりもよって柔道部かよっ」

頭を抱える智明に、望はけけらと笑い声を上げる。そんな望を智明は睨みつけるが、望は気にすることなくにやにやと智明を見た。

「自業自得だろ」

望の言葉に大輝が頷いた。

「お前の素行が悪すぎるんだ」

大輝も、望に同意するように言った。望は後押しが出来て勢いがついたのか、饒舌に智明を茶化していく。

「大方、この岡田って人の姉か母親か、もしくは彼女の姉とか母親とかにでも手を出したんじゃないのか」

「それで適当に遊んで切り捨てた、とかな」

「最低だな、お前」

「庇いきれん」

望と大輝の言葉に、智明はわなわなと肩を震わせた。

「お前らなーっ！」

「ま、潔く一発くらいは殴られてこいよ」

望の言葉に、智明は力尽きたといった感じでうな垂れる。

「やっぱり、行かないとまずいのかな」

行かなくてもいいか？という智明の視線を、望と大輝は首を振り却下する。

「この前みたいに教室にまで押しかけられての修羅場はもう嫌だろ」

先月の騒動を思い出して、望は苦笑する。

先月もこうして智明は呼び出しを受けていた。原因は、遊びで手を出した女性がこの学校の生徒の姉だった。智明は2回ほどその女性とデートを重ねたのだがどうにも思い込みの激しい女性だったらしく、早々に切り捨てたという。そうして傷つき引きこもりがちになってしまった女性の弟が智明を呼び出したのだが、智明はくたらないと無視をした。その結果、弟は望たちの教室に乗り込んできて、智明と乱闘を繰り広げたのだ。

どうにか騒ぎが収まったところで、観戦していたクラスメイトは口々に「年増キラー」とか「うらやましい」などとはやし立てていた。だが自分が同じ立場には絶対になりたくないというのが周囲の一致した見解だった。

「折角余計な揉め事を回避するためにわざわざ男子校に入ったつてのに、なんでこんな面倒なことばかり起こるんだよ」

智明はうんざりとして言った。

「そっぴや、お前の入学理由って、付き合ってる彼女が原因だったよな」

以前ちらりと聞いた事のある話題を望は振った。

「ああ」と智明は大真面目に頷いている。

「俺は同世代の女には興味はないっていくら言っても彼女たちは信

じてくれなくてさ。やっぱり若い女のほうが良いんじゃないかとか訳が分らないことで怒ったり落ち込んだりするんだよ。俺が何度も言っただけで完全に信じてくれないし。だからわざわざ男子校を選んだんだよ」

俺って優しいよな、と智明に言われて、望も大輝も素直には頷けないでいた。

「はー、どうして俺は男からの呼び出しなんてものを受けないといけないんだよ。あけみさんからの呼び出しなら授業サボってでも駆けつけるのに」

「それって新しい彼女？」

「そう、先週知り合ったんだ。29歳、広告デザイナー。美人だしセンス良いし、しかもスタイルよくってさ。普段はきりっとしてるけど二人になると結構可愛いんだな、これが。やっぱり付き合うなら年上だよな」

「・・・そんなことしてるから、めぐり巡って呼び出しが来るんだよ」

望が呆れたように言うと、智明は手紙の存在を思い出してうな垂れた。

「・・・仕方がない。行ってくるか」

「骨は拾ってやるぞ」

「いらん！」

けたけたと笑う望を智明は力いっぱい睨んだ。

反撃に出ようと言葉を探しているうちに担任教師が教室へと入ってきてしまった。そこで三人の会話は中断され、他のクラスメイトたちと同様に望や大輝は急いで自分の席へと戻っていった。

翌日、望が登校するとすでに智明が教室にいた。

昨日と同様に机に突っ伏している。なぜだか昨日よりも暗い雰囲気をもっていた。

「はよっ」

とりあえず明るく声を掛けてみるが、智明の反応はなかった。

どうしたのかと訝しんでいると、教室に大輝が入ってきた。望は大輝と目配せをして、視線を智明へと移した。やはり昨日の呼び出しで何かがあったのだろう、と望は心配半分、湧き出す好奇心に引きずられるように智明の様子を伺おうと覗き込んだ。

「智明？」

名前を呼んでみると、ゆっくりと智明が頭を上げていく。その顔は、昨日よりも少しやつれているように見えた。顔色も悪く、病人のようだ。

「どうしたんだ？」

智明の顔に痣はない。ということは、昨日の呼び出しで殴られたわけではなさそうだ。

「昨日・・・」

智明が重い口を開く。望と大輝は智明の声に耳を澄ませていった。
「俺、呼び出されて行っただろ」

望と大輝は頷く。

「そこで岡田って先輩が待ってたんだけど」

一体何があったのかと、望はごくりと唾を飲み込んだ。

「・・・告白、されたんだ」

「・・・」

智明の言ったことがすぐには理解できずに、望は眉を寄せた。

（告白・・・って、あれか？好きですとか付き合ってくださいとかいう告白か？）

「・・・って、なんじゃ、そりゃ!？」

素っ頓狂な声を望は上げた。目を見開いて智明を凝視する。

智明は、珍しく苦渋に満ちた顔をしていた。

「好きだとか何とか言われたってことか!？」

「ああ」

「・・・うそだろ」

「マジ」

「・・・へえ」

望は引きつったように無理やりに笑みを浮かべた。

それを一瞥して、智明はまた盛大なため息を落とした。

「それで?どうしたんだ?」

興味深々に望が聞いた。

「どうもこうも、断ったよ。冗談でも言うな!ってな」

「冗談なのか?」

「そうであって欲しいよ」

智明は眉間に皺を刻む。その様子から、どうやら冗談ではないのだという事だけは望には分った。

「しかし、驚いたな」

「まったく。殴られる事を覚悟して言ったらいきなりだぜ。冗談にもならねーよ」

「いるんだな、そういう人」

一応男子校なので校内で噂されるカップルは全て男同士だ。だがそれらの噂の大半はただの余興であったり茶化しであったりするもので、実際に男同士で付き合っているという人は望も智明もいまだに見たことはなかった。

「そういうのはテレビとか漫画だけでいいっつーの。やるならよそでやってくれよな」

心底嫌そうに智明は言った。

確かに、と望は頷いた。自分が同じ立場になっていたらと思うと、恐ろしくてそれ以上考えることは出来ない。正直、自分が呼び出さ

れなくて良かったと思うほどだ。

（ま、俺みたいに平凡な男には呼び出しなんてかかるわけがないけどさ）

浮ついた話題の一つももったことのない望は自嘲する。

「そもそも、どうしたら同じ男を好きになんてなれるんだよ。俺には理解できねー」

智樹は頭を掻きながらばやくように言った。望は頭を悩ませながらも頼りない声を返す。

「うーん・・・人として好きになる、とか？」

「馬鹿かつ、その理屈だと女も好きになる可能性があるってことだろ」

「そついう可能性はないものなのかな。それが普通なんだし」

「普通じゃねーから同じ男を好きになるんだろ」

「ホモってやつだろ」

「そうつ。正しくはホモセクシユアルっていうんだ」

「女の子同士だとレスだろ」

「ホモセクシユアルってのが同性愛者って意味だからな。両方の意味を含んでるんだってさ。ちなみに、バイ・セクシユアルが両性愛、つまり男も女もいける奴の事を言うんだよ。俺たちみたいに女が好きな奴のことはヘテロ・セクシユアルって言うんだってさ」

「へえ、・・・なんか詳しいな」

「・・・ネットで調べたんだよ」

智明が不愉快そうに言った。知らなくてもいい知識を仕入れてしまったことへのささやかな抵抗とでもいうのだろう。

「じゃあ、ゲイってのは？ホモってことだろ？」

「ゲイは男の同性愛者を指すらしいんだけど、一般の同性愛者の事を言う場合もあるらしい。さっき言ったレスってのがレスビアン。女の同性愛者って意味。それはまあ、ちょっと見てみたい気がするけどな」

「百合丘高校にはいるのかな」

「いるかもなー、ここにホモがいるんだから。お姉様とか呼んでるのかね。いいねー、ロマンだよなー」

「・・・どこがだよ」

望は呆れたように智明を見た。女同士で恋愛をされたら自分に回ってくる女の子が減るじゃないかというのが望の正直な気持ちだった。

「あー、でも・・・そっかー」

「ん？なんだ？」

「いや、な。ちょっと思い出したんだよ。ネットで調べてたらさ、ゲイってのの定義は結構曖昧なんだった」

智明の言葉に望は首を傾げた。言っている意味がさっぱり分らないといった様子だ。

「つまり、同性を好きになる事をゲイって言うだろ。だけど、ある特定の環境で同性に対して恋愛感情を持つこともゲイというんだ。もつと言うと、そういう特別な環境の中で同性に対して恋愛感情を持つ可能性がある人もゲイだといえないこともない。ってことは、同性に対して絶対に恋愛感情を抱かないという人以外はゲイの可能性があるってことだ」

「それって、誰でもゲイになるかもしれないってことか？」

「ってことだろ」

「・・・特別な環境って何だ？」

「例えばここみたいに男子校で女が周りにいないってところかだろ。選べるのが男しかいないとき、人間は男を恋愛対象としてみる事が出来るようになるらしい」

「・・・うっそだー」

「いや、マジ。そういう・・・人間の心理っての？研究している偉い人が言ってるんだとさ。ま、俺は違うけどな」

「・・・それは知ってる」

自分も違うのだ、と思いながら望は頷いた。

智明はいつそう表情を暗くして言う。

「よく分らないのは、同じ男に性欲を感じてもそれをゲイとは言わないとする考え方があつてことだ」

「・・・意味が分らん。何なんだ？それ」

「俺にもよく分らん。俺的には、性欲つてのは相手の魅力で感じるもんだけど、いるだろ、女なら誰でもいいとか、穴があればそれでいいとか」

「最低だな」

望は顔をしかめる。

「それと同じで男の画像とか映像とか、体の一部とかに感じる奴もいるんだつてさ。そういうのは同じ同性愛者から見てゲイとは認められないという場合もあるんだとさ」

「・・・さっぱり分らん」

「そこに愛があるかないかの違いなんだろうな」

「愛、か」

「同性愛つて言うぐらいなんだから、愛は必要なんだろ。俺にはその愛が理解できん」

「好きつてことだろ」

「男は女を好きになるもんだ！特に熟女は最高だ！」

「・・・俺にはそれもよく分らんよ」

智明の力説に望は痛くなる頭を抱えるようにして呟いた。

「なあ、俺らつてどうして女を好きになるんだ？」

ふと疑問に思ったことを望は聞いてみた。智明は馬鹿にするように乾いた笑い声を上げる。

「俺たちが男だからだろう」

「でも・・・」

「望は、男に対して好きだ惚れたなんてことを思えるか？」

「・・・つていわれてもなー」

「難しく考えるなよ。こういうことは理屈じゃないんだ。無理だと思つたらどうやったつて受け入れられないんだよ。いいか、お前は俺と恋愛が出来るか？」

智明に聞かれて、望は智明を見た。智明も、美形とまではいかなかった顔立ちをしている。これで甘い言葉を吐かれたら、確かに女性たちは気持ちが傾いてしまうのだろう。

じつくりと智明の顔を見つめる。そして想像してみた。もし女の子と付き合うならしてみたいことを思い浮かべ、その相手を智明に置き換えてみる。

朝待ち合わせをして学校へ行く。手を繋いで道を歩く。腕を組んだり、顔を寄せて囁きあったり。休みの日には待ち合わせをしてデートを重ねる。夕暮れの公園で二人は見つめ合い……。

「……ありえねー」

ぶるつと、望は身体を振るわせた。鳥肌の立つ腕を擦った。

「そうだろう」と智明は威張るようにして頷いた。

「男は女を好きになるもんだ。男なら女を抱きたいと思うんだよ。これが普通なんだ。神様が決めた事なんだよ。知識も理屈も関係ないんだ。無理なものは無理なんだ！」

智明は拳を作りながら超え高々に叫んだ。

「男にはあの柔らかい胸がないんだぞ、どうやってそれを好きになれというんだよ！」

「智明、胸のかい女が好きだもんね。彼女さんたち皆そうだし」

「貧乳も好きだぞ」

「……聞いてねーよ、そんなこと」

胸を張って答える智明に、望は呆れたようにぼやいた。

「俺の好みは至って普通だぞ」

「……そうか？」

「そうだ！ちよつと年上が好きただけなんだから！男が好きという男の方が異常なんだよ。どんなに理屈を並べたって、結局は少数派なんだ。それこそが、普通じゃないって事を証明しているんだよ」

智明は自分の言葉に絶対の自信でもあるように言い放った。

「そんなに悪い事か？」

今まで二人の会話を黙って聞いていた大輝が、ボソリと言った。

大輝の言葉に、望と智明はぴたりと会話を止める。

「岡田先輩はただ智明を好きになっただけだろう。それがそんなに悪い事なのか」

言われて、智明は顔を歪めた。

「お前も男に告られたら分るって。鳥肌立つぜ」

智明の言葉に、大輝は眉を寄せた。

「しかし・・・」

「何だよ、何でそんなに岡田って奴の肩入れするんだよ。何か？お前もおホモだちとか言うんじゃないかな」

智明の言葉に、大輝は黙り込んだ。重苦しい空気が三人を包んでいく。

ややあと、智明が呟いた。

「・・・マジかよ」

信じられないといった様子で大輝を見る。

「何？何だ？」と一人状況を理解し切れていない望が、黙り込んでしまった智明と大輝とを見比べていく。

「こいつも男が好きなんだとよ」

ぞんざいな智明の物言いだったが、言われた内容のほうに衝撃的で、望はただ大輝を凝視するだけだった。

望に見つめられて、大輝は徐に二人から視線を逸らす。

「悪い」と小さく呟くと、静かに大輝は二人から離れていつてしまった。

「でさ、中村の奴ズボンのファスナー全開だって気付かずに山口達を説教してたんだってよ」

「あははっ、笑える！」

望と智明は笑いながら手元のパンにかじりついた。

昼休みの中庭。数人の生徒がちらほらと昼食や昼寝をするために座り込んでいる。望と智明も同じように、昼食となるパンを購買で買い込んで中庭へと来ていた。いつものことだ。ただ、ここに大樹の姿が無いだけだった。

知り合ってから初めて二人きりで食べる昼食は、いつものように他愛もない会話を繰り返していてもどこかぎこちないものになっていた。時折、話が尽きたように二人とも口を閉ざす。短い沈黙の後、どちらからともなく無理矢理に会話を引きだしていた。そしてまた、沈黙が来る。その繰り返しだった。

どうにも、二人はいつものペースがつかめずにいた。大樹がこの場にいたとしても率先して話題を振ってくるような男ではないから、話をするのはいつも望と智明だった。大樹はただ側で聞いているくらいなのだ。それなのに、今ここにいないということがずいぶんと違和感を感じさせる。

望は校舎を見上げた。この建物の何処かに大樹はいるのだろうか。

一人で昼食をとっているのか、それとも他の誰かを誘っているのか。大樹が自分たち以外の者を誘いに行く様が望には想像できなかった。

「・・・あいつ」

ポツリといった智明の声に、望ははっとしたように智明を見た。

智明は視線を逸らす。

「何でもない」

不機嫌そうに黙り込んでしまった。

智明は大いに大樹の事を気にしている。それは望も同じだった。

「なあ」

大樹が離れていった朝からずっと思っていたことを、望は口にした。

「朝のはさ、俺らの方が・・・悪かったよな、きつと」

望の言葉に、智明は表情を曇らせた。押し黙り、何かを考えるようにじっと自分の膝の辺りを見つめている。

「・・・確かに、俺も言い過ぎた」

ぼそりと、智明が言った。

「いきなり男から告られたりして・・・誰だってイラっとくるだろ！」

「・・・だけど、さ」

「うん、頭に血が上っちゃまってさ、言わなくてもいいことまで言っちゃまった・・・気がする」

「俺も・・・何も言えなかったし」

二人は思い空気の中、次の言葉を探していた。

「大樹は、大樹だよな」

望の言葉に智明は大きく頷いた。

「そうだ！そうなんだよ！ダチの好みが少し普通と違っていたとしてもさ、あいつが俺たちのダチだってことには変わりないんだっ」「そうだよな！」

「ホモだろうがゲイだろうが、大樹は俺らのダチだよな！」

「そうそう！って、ホモもゲイも同じことじゃないか？」

「ばっ、お前、ここで揚げ足とるなよ」

「ははっ、お前も大概馬鹿だよな」

「うるせーよっ」

智明が小さく咳払いをした。

「まあ、さ。俺も胸はれるような恋愛ばかりをしてきたわけじゃないしな」

「お前の場合は胸張れないようなことの方が多いんじゃないのか」

まだ大樹の方がましだと望は笑った。

智明は心外だとはかりに眉を寄せる。

「お前みたいに全くお付き合いの経験がないってのも俺はどうかと思っけどな」

智明の言葉に望の眉間がピクリと震えた。

しばらくにらみ合いが続いた後で、どちらからともなく二人は吹き出して笑った。

「とりあえず、大輝に謝るか」

「そうだな」

望は智明の言葉に頷いた。

これでまた、仲のいい三人組に戻るだろう。そう思うと望の気分はようやく浮上していった。

「なんなんだよ！あいつは！」

智明の怒鳴り声が、昼休みの中庭に響いた。周囲にいた生徒達はちらりと智明を見るが、さして興味が惹かれたわけでもなくすぐに自分たちの時間へと戻っていく。

智明は他人の目をはばかりこともなく怒りをあらわにしていた。握りしめられた焼きそばパンが悲鳴を上げている。

話し合いの末、大輝に謝ろうと決めた昼休みからずっと、望と智明は大輝に歩み寄っていった。それをあからさまに避けている様子の

大輝に、二人は未だに謝罪の言葉を伝えられないでいた。話しかけても反応がない、休み時間は何処かへと姿を消してしまふ、目を合わせない。まるきり子どももの喧嘩のようにしか周囲には見えなかったのだが、当事者である望と智明は必死だった。どうかして仲直りをしようと試行錯誤で挑むのだが、その努力をあざ笑うかのように大輝は二人と関わろうとしない。そんな状態が三日目に突入し、ここに来て智明の我慢の限界が越えてしまったのだ

った。

「俺たちも悪かったと思ってこうして譲歩してやってるのに、あいつのあの態度は何なんだよ！？」

わなわなと震える手の中にある焼きそばパンが、望は気がかりでならない。だが今それを言える雰囲気ではなかった。

望は、智明のような怒りを持つてはいなかった。あるとすれば寂しさに近い感情だった。あからさまに背中を見せられ拒絶されている現状が、息苦しいほどにつらく感じてしまう。あれだけ近くに感じていた大輝の存在が、今はとても遠くに感じてならなかった。

どうすれば元のような関係に戻れるのか、考えれば考えるほどにまずは話が出来る状況を作らなければならないと結論に達する。そ

の状況を作るのにはどうしたらいいのかは、全く分からなかった。いいアイデアも浮かばない。それは智明も同じのようで、だからこそ苛立ちを募らせているのだろう。

「くそっ」

智明はつぶれかかった焼きそばパンを無理矢理口の中に押し込んだ。詰め込みすぎて咽てしまった智明は手元の喉に詰まったものをお茶で飲み下していく。それでも咳き込む智明の背中を、望は擦ってあげた。

苦しそうに、喉のつまりをとろうと智明は自分の胸を軽く叩く。その手が不意に止まった。視線を遠くへと向けている。望は智明の視線を追うように周囲を見回した。

渡り廊下の真ん中辺りで、一人の男子生徒が立ち止まっていることに気付く。望には見覚えのない顔だった。その男子生徒は自分たちを見ているようで、だが望と視線が合わないので智明を見ているのだと気がついた。

望が智明を見ると、智明は険しい表情で男子生徒を睨んでいた。ふんっ、と鼻を鳴らして盛大にそっぽを向く。

望は智明と男子生徒とを見比べた。智明に顔を背けられた男子生徒は、肩を落として校舎へと消えていつてしまった。

「なあ、さっきのって」

「岡田とか言う馬鹿野郎だ」

むすっとした表情で智明がいた。

岡田、と望はその名前を口の中で繰り返した。

「あつ、まさかお前に告った先輩か!？」

望の張り上げた声に、智明は仏頂面で頷いた。

なるほど、と望は思った。好きだった相手にここまで嫌いなんですといった態度を見せられると、誰であつても肩くらい落とすだろう。

望には、男同士で恋だ好きだと言い合うことがいまいち理解仕切れていなかった。だが、先程の岡田の姿を思い出すと、さすがに哀れに思えてきてしまう。

「智明、さっきのはやり過ぎなんじゃねーの？」

もう少しやり方というものがあるだろうと望は諭す。

「何言ってるんだよ！いいか、望。今回の面倒ないざこざは全てあのバカ田が原因なんだぞ！あのバカ田が俺に告つたりなんかしなければ、こんな事にはなっていないんだ！」

ただの八つ当たりとしか思えない言い方だった。しかも名前まで勝手に変えられている。やはり岡田を哀れに思ってしまう望だったが、智明の言うことに反論することも出来なかった。少なからず望も思っていたことだったのだ。あの告白の騒動が無ければ今この場所には大輝もいたのではないかと思ってしまう。

つらつらと考え込んでいる望を、智明は同意してくれていないのだと思いこんだ。自分は間違っていないのだと言うことを強調するように声を張り上げていく。

「それに、お前だつて一度告られてみれば分かるぞ。マジでやばいつて。明らかに俺を押し倒す気でこられたら鳥肌立つぜ、吐くぜ、絶対に」

智明は自分の腕をさすった。

「俺は年増な美人を押し倒したいんだつ。なんで好きこのんで男に押し倒されないといけないんだよ！」

「・・・その考えもどうかと思うけど。ならば、お前が押し倒してみれば？」

「誰をだよ」

「えつと・・・岡田？」

「ありえねーよ！」

「そうか？」

「お前なら出来るつてのか！？」

言われて、望は先程の岡田の姿を思い描いた。柔道部ということも会つてか、遠目でもかなり体格のいい男だった。ごついという言葉葉がよく似合っている。

「・・・無理だな」

「だろう」

智明のうなずきに、望も頷いて返した。

大輝ならばどうだろうか。

ふと、望はそんなことを思いついてしまった。

自分が大輝を押し倒したらどうなるのだろうか。望は想像してみ
る。

ベッドに大輝を押し倒し、大輝を見下ろす。ゆっくりと顔を近づ
けていく。キスをして、それから・・・。

（ありえねー。どうやって俺が大輝を押し倒せるんだよ。不可能
だろ）

望は頭の中の映像をかき消すように頭を振った。

大輝は望よりもひと回りも体格が大きいのだ。力で勝負しても勝
敗は目に見えている。押し倒すことはもちろん、けり倒す事すら望
には無理だ。それは望自身が一番身に染みて分っている。隣を歩け
ば、体格の差は嫌でも目に付いてしまうのだ。それに。

（あいつが女になるってのも・・・）

望は頭の中で大輝の姿を思い描く。そして街でよく見かける百合
丘高校のセーラー服を着せてみた。ゆっくりと合わさっていく二つ
の残像。

うつ、と望は嗚咽を漏らした。

（似合わねー。・・・ってか、怖えーよ。マジで）

望は自分の想像力の豊かさに恐怖を覚えながら、鳥肌の立った腕
を擦った。

大輝には女の役回りは想像すら出来ない。

（なら、・・・その逆ってのは・・・？）

大輝が自分を押し倒す。大輝に見下ろされ、自分は大輝を見上げ、
ゆっくりと大輝の顔が近づいてきて。

（って、おい！男同士で何をするんだよ！？又キあうのか？・・・
ない！絶対無い！無理！）

望は無理やり思考を止めた。

これ以上は考えられない。明らかに自分の許容量を超えているために、望むの頭はショート寸前だった。

望の心臓がどくどくと音を立てている。それを落ち着かせるように望は深く息を吸い込み、ゆっくりと吐き出していった。

同性愛というものに対する自分の中の偏見はどうしたって拭えない。それが大輝にも分かってしまっているのだろう。だから大輝は自分たちを避けているのではないかと思えてならなかった。

「もう、前のようににはなれないのかな」

呟いた望の言葉に、智明は黙り込む。

会話が途絶え、沈黙が二人の間に流れていく。

望は校舎を見た。

もう、前のように大輝と一緒に食事をしたり遊んだり、馬鹿な話で笑いあったりすることなど出来ないのだろうか。
そう思うと、望は一層の息苦しさを感じていた。

「起立つ、礼！」

学級委員長の掛け声と共に、教室内にいる生徒は正面を向いたまま腰を折った。

望もそれに習うように頭を下げる。

顔を上げると、クラス内はすでに浮き足立っていた。放課後になる瞬間というものは、毎身体感していても嬉しいものだ。机に拘束される授業から開放され、ようやく訪れた自由な時間をどう過ごすのか、それぞれが口々に相談しあっている。

そんな教室内で、望は一人沈んだままの心を抱えていた。

何をしてても面白くない、授業はもちろん、智明と話をしても心から楽しめない。一緒にいるのに目の前でため息を何度かされた

ら智明といえど言い心地はしないだろう。だが、今の望には沈んでしまった心をどうすることも出来ずにただ持て余していた。

「じゃあ、俺行くわ」

智明が、努めて明るい声で望に言った。

「今日もデートか？」

「おう。今日は久しぶりに美千代さんと会っただよ」

「・・・それって確か、人妻の人？」

「そう」

智明はにやりとして言った。

「旦那が出張なんだってさ」

「旦那は働いて妻は不倫かよ」

「結婚しても刺激つてのは欲しいんだよ。特に家にこもりがちな専業主婦はな」

「お前に貢ぐ金も旦那が稼いでるんだろ。凄い世の中だよな」

「なんだよ」智明は顔をしかめた。「やけにからむじゃねーか」

不機嫌そうにして言った智明の声音に気付いて、望は自分の言った事に気が付いた。考え無しの発言を後悔しながら智明を伺い見ると、智明はそれほど怒っている様子ではなく、むしろ心配そうに望を見ていた。

「悪い」と望は言った。智明の付き合いに対して完全に理解しているわけではないが、それでも言わなくてもいいことまで言ってしまったという自覚はあったのだ。しよげた様に肩を落とす望に、智明は「気にするな」と言った。

「いろいろ思いつめるなよ。考えたってどうにもならない事もあるし、時間が経てばどうにかなる事もあるんだ」

智明が大輝の事を指していつているのだと分っていたので、望は力なく頷いた。

「望はこれからどうするんだ？」

「ああ、俺は図書委員があるから」

「そっか。大変だな」

「つていつても、ただカウンターの中で座ってるだけだからさ。利用者も少ないし」

「その座ってるだけつてのが俺にはどうにも我慢できないんだよな。俺、絶対図書委員はできねーよ」

智明の心底嫌そうな声に、望は少しだけ笑みを浮かべた。

ふと視線を走らせると、ちょうど教室から大輝が出て行くところだった。剣道部の部活に出るのだろう。望の席で話している二人を振り返る事もなく、大輝はそのまま教室から姿を消していった。「じゃあな」とか「またな」とかの挨拶が一切ない。朝も、言葉を交わしていなかった。

(・・・大輝と喋ってないなー)

望はぼんやりとそんな事を思っていた。大輝の声を聞くことも、ここ数日は殆どなかった。どんな声をしていただろうかと思い出さなければ分らなくなってしまうている。もしこのまま大輝と仲直りする事が出来なければ、自分は大輝の声を忘れてしまうのではないか。そんな事を考えてしまった望は、固く一文字に結んだ口の中で奥歯を噛み締めた。

「望！」

声と共に、望は智明に思いっきり肩を叩かれた。

我に返ったように、望は智明を見る。

「そろそろ行かないと遅刻だから、俺は行くぞ」

「おう」

「大輝のことは、・・・また明日にでも考えるか。どうせ今日ももう話せるチャンスはなさそうだし」

「・・・だな」

「お前も図書委員頑張れよ」

「頑張るほど仕事はないけどな」

「ははっ、そりゃそうだ。んじゃ、また明日な！」

腕時計で時間を確認しながら、慌ただしく智明は教室を飛び出していった。

その姿を見送っていた望は、ゆっくりとした動作で自分の鞆を取り上げた。

「・・・行くか」

少し気だるそうに一人呟いて、望は教室を出て行った。

「おいつ、お前！」

背後から呼び止められて、望は廊下の真ん中で足を止めた。

望の向かう図書室は、校舎の3階にある。

一年生の教室のある4階と違い、3階は2年生の教室が並んでいた。部活などをしていない望には、上級生に知り合いなどいない。普通に考えると望を3階で呼び止める者など殆どいないのだ。だが、声がすぐ背後から聞こえてきた事もあり、不信に思いながらも望は立ち止まったのだ。

振り返ると、そこには見覚えのある男が立っていた。顔をしかめて、望をまっすぐ睨みつけてくるその男を見て、望は驚きで目を丸くした。

（バカ田・・・じゃなくて、岡田栄介だっ）

智明の嫌そうに歪められた顔と共に、智明に送られた真っ白い封筒が望の頭を過ぎった。

「話がある。ちょっと来い」

言いながら、岡田は顎をしゃくった。

途端に、望は不安になった。

（告白？・・・って、それはないな）

岡田の醸し出す雰囲気は、あまり穏やかではない。それこそ「生意気だ」「目障りだ」と因縁をつけられて呼び出されているような感じを受ける。とてもこれから告白しようという人間の出す雰囲気ではなかった。もっとも、望は一度も告白など誰からも受けたことがないので、告白をしようとする人の出す雰囲気はどういったものかは分らない。分るのは、いきなり殴られないように気合を入れなければいけないという事だけだ。

（俺、何かしたかなー・・・初対面なのに）

岡田がどういった人物かも、望は知らないのだ。あえて言うならば、数日前に中庭から渡り廊下を歩く岡田の姿を遠めに見たくらいだ。そのときの印象は、智明にふられて落ち込む可哀想な男というだけだった。

「おい！」

岡田に叫ばれて、望は慌てたように岡田の後に付いていった。前を歩く岡田の背中を見つめながら、何とか逃げ道を見つけようと視線をさまよわせる。だが、逃げられたとしても明日以降待ち伏せされてしまつては意味がない。

（しかたない、どうにかして謝りつつ穏便に・・・いっそ、智明の名前でも出すか？）

思い至り、望は頭を振った。

（二人が付き合つてゐるならまだしもなー。智明の奴、バ・・・岡田先輩を振つたんだし・・・）

「逆効果だよなー」

「あ？」

突然の岡田の声に、望は吃驚して立ち止まった。

顔を振り仰ぐと、目の前にいる岡田は望に向き直っていた。周辺には人影はない。いつの間にか階段裏の死角となる場所にたどり着いていた。

（俺・・・ピンチか！？）

いつそのまま走って逃げてしまおうかと望は真剣に悩んでいた。その考えを察したかのように、岡田は望の退路を断つ位置に身体をずらしていく。

じつとりとした視線で岡田に睨みつけられて、望は居心地の悪さと気持ち悪さを感じていた。岡田の目は決して好意的ではない。親の敵でも見るような目だった。

「・・・あの」

望は恐る恐る声を掛けてみたが、岡田にひと睨みされて口をつぐ

んだ。

しばらく岡田の視線から逃れるように望はうつむいたまま、時間が過ぎるのを待っていた。

「お前・・・」という岡田の声に、望は顔を上げる。未だに険しい顔つきのままの岡田は、いつそう眉を寄せて、言った。

「お前は早瀬の何なんだ？」

「・・・は？」

一瞬、望は何を言われたのか分らなかった。

時間をかけて岡田の質問の意味を考えてみる。だが、苛立たしげに「聞いているのか？」と岡田に言われて、望はとりあえず答えなければと口を開いた。

「友達ですが」

それが何なのだ、と望は岡田を見る。岡田には、その目が自分を嘲笑し挑発しているようにしか見えなかった。一気に、岡田の頭に血が上っていく。

「・・・本当にただの友達なのかよっ」

「ただのって・・・友達は友達ですよ」

いったい何を言い出すのかと、望は岡田を訝しげに見る。

岡田は欺瞞に満ちた目で望を睨んでいた。その目の奥に、暗くどろりとした揺らめきを見て、望は少し背中に寒気を覚えた。周囲には相変わらず人影はない。表廊下に出る道は岡田が身体で遮ってしまっている。望は無意識に一步後ずさっていた。

「隠すなよ」

全て知っているのだとも言つように岡田は言った。これには望も不快感を表していく。

「一体、何なんですか」

これ以上の会話は馬鹿らしいと望は重く息を吐いた。

「俺、もう行かないといけないんで」望は付き合つてられないとばかりに岡田の横をすり抜けていく。だが、その歩みも岡田に腕を捕まれることによって阻まれた。

きつく握られた箇所には鈍い痛みが走る。望は振り返り、腕を掴んでいる岡田を睨みつけた。

「何なんですか」

「ちゃんと答える」

「だから、俺と智明は普通の友だちです」

望の口から智明の名前が出た瞬間、腕を掴む岡田の手に力が込められた。増していく腕の痛み、望は顔を歪める。振り払おうと模がいてみるが、岡田の手は緩むことなく、逆に一層強い力を込められていった。柔道部に所属している岡田とスポーツをほとんどしない望では、力の差は歴然だった。一回りも大きい体躯を持つ岡田には、望はどうやっても勝ち目は無い。力に訴えられたら抵抗することもままならないだろう。今ですらたいした抵抗も出来ないのだ。望の頭の中ではどうやって逃げるかという事にしか考えが及ばなかった。

「何で、・・・何でお前みたいな奴が早瀬の側にいるんだよ」

語尾を震わせて、岡田は言った。

大きなお世話だ、と望は思う。

「お前みたいな平凡な奴を、見た目も悪いし印象は薄いし」

岡田は望を上から下まで舐めるように見て、吐き出すように言った。

（俺は不細工じゃないぞ！普通だぞ！）

望は心の中で叫んではみるものの、声に出すことは出来なかった。岡田の濁った目が、恐ろしくなってくる。指先の震えを隠すように、望は手を握り締めた。

「俺は柔道部で大将をしているんだぞ。来年は部長になるんだ」

それがなんなのだと望は思う。だが、岡田は一人自分の世界に入ってしまったかのように話し続けた。

「俺が入ってから春の武道館ではベスト8までいったんだぞ」

自分の功績なのだと自慢げに岡田は言った。

「はるのぶどうかん？」

「全国高等学校柔道選手権大会だ。知らないのかよ」

（知らねーよ！）

「高校柔道三大会の一つだぞ。その全国大会で俺はベスト8になったんだぞ」

（・・・それは、すごいな）

「俺がそこまで桂南の柔道部を強くしてやったんだよ」

（言い過ぎだろ。他の部員達が報われないじゃないか）

「俺は、お前みたいな何の取り柄もないような奴とは違うんだよ」

（・・・俺が報われねーよ）

「どうして俺が駄目でお前みたいなのがいいんだよ！」

（どれだけ自信家なんだ、お前は！）

そこまで考えて、望は律儀に頭の中でツツコミを入れている自分が馬鹿らしくなってきた。やはり、こんな事に時間を割いてやるのは勿体ない。

捕まれたままの腕が自由になればすぐにでも逃げる事が出来るのに、と望は忌々しく岡田の手を見下ろした。

「何で俺じゃ駄目なんだよ」

岡田の様子を見る限り、智明は岡田の言いたいことも言わずに、何の説明もせずに告白を一方的に切り捨てたのだろ。いきなり男に告白をされて、驚きと衝撃で相手を思いやる事を忘れてしまったのだろ。それは仕方のないことかもしれない。自分が当事者であったとしても、そういったときに冷静でいられる自身は望むにはなかった。だが、智明のしわ寄せが自分に来ていることにどうしても理不尽さを感じてしまう。

（・・・ダチの為だしな）

ここは自分が大人になって弁明をしてやろうではないかと望は思い直した。ここで智明に貸しを作っておくのも良いだろうという計算も望の中にはあった。

（男だから嫌だったのが理由だけど、でもそれを言うよりは）

「智明の好みは一貫してますよ。スタイルの良い年増女が好きなん

です」

これは言い過ぎだろうと望も思ったのだが、ほとんど事実のことなので仕方がない。望は岡田の様子を窺うように見た。

「ふざけんな！」

岡田は顔を赤らめて叫ぶ。口から飛び散る唾液が目に映り、望は嫌そうに顔を歪めた。望のその表情が更に岡田の怒りを膨張させていく。

「そんなことを言ったら俺を誤魔化せるとでも思ってるのか!？」

「誤魔化すとかじゃなくて、本当にそうなんですってば」

「なら何でお前が早瀬の側にいるんだよ！」

「だからっ、俺は友だちだから」

「俺を馬鹿にしてるのか!？」

すでに、岡田には望の声など届いていなかった。

岡田は望の腕を掴んだまま、望を壁に押しつける。空いていた右手で、望の襟足を締め上げた。

息を吸い込めなくなり、苦しくて望は顔を歪める。必死に酸素を得ようと口を開けるが、上手く呼吸が出来なかった。

「お前、目障りなんだよ。お前がいるから！俺がこんな目に遭うんだ」

（ちがつ・・・俺は）

「か・・・関係、な・・・い」

「うるせー！」

岡田はもう一度望の身体を壁にたたき付けた。その反動で、望は壁に強く頭を打つ。その衝撃に、望は目の前に火花が散ったような錯覚を受けた。

「早瀬と別れるよ」

岡田は望に顔を寄せて、声を低くして言った。

「お前みたいなのがいると、早瀬も迷惑なんだよ」

「・・・な、んで」

息苦しさの中で、望はもがく。必死に振り絞った声は震えていて、

それを岡田はあざ笑う。

「お前さえいなくなればっ」

「くっ・・・」

（こいつ、やっぱりバカだ）

薄れていく意識の中で、吉乃は視界に広がる岡田の歪められた顔を見つめていた。

「望！」

名前を呼ばれた気がした。

懐かしい声だ。

突然、望の身体が突き飛ばされる。締め上げられていた首は自由になり、一気に酸素が体中を駆けめぐった。その勢いに目眩を覚えながらも、望はふらつく身体を壁に寄りかからせて倒れるのをどうにか防いだ。

涙で滲む視界の中で、望は賢明に目をこらす。

望の目の前には、男の背中があった。その背中越しに、しりもちをつき手で頬を押さえている岡田の姿が見えた。

望は目の前にある背中を見つめた。どうして、という疑問ばかりが頭の中に浮かんでくる。

「・・・大樹」

弱々しい望の声に反応するように、目の前にいた大樹の背中がピクリと揺れた。

大樹が振り返り、望を見る。目を細めて、すぐに岡田に向き直った。望からは大樹の表情は伺えない。

「何をしているんですか？岡田先輩」

「それはこっちのセリフだ。いきなり殴りかかるなんて、どういう事だよ。お前がこんな乱暴な奴だなんて俺は知らなかったぞ」

吐き捨てるように岡田は言った。ゆっくりと立ち上がると、岡田

は大樹を睨みつけた。

「望の首を絞めていた人に言われたくはないですね。自業自得ですよ」

「なっ、あれは・・・頭に血が上って」

「智明にきつぱりと振られたのに付きまとって、関係のない望に八つ当たりするなんて、岡田先輩らしくないですよ」

大樹の言葉に、岡田は顔を赤らめた。

「引き際を間違えると、見苦しいだけです」

「はっ、お前に言われたくねーよ！お前だつてっ」

そこまで言つて、岡田ははっとしたように口を噤んだ。少し血の気が失せたように顔を悪くして、視線を大樹から逸らす。

「岡田先輩」

大樹に名前を呼ばれて、岡田の身体がビクついた。

「今回の事がばれると、先輩も大変でしょう。部活の方にも大きな影響が出る」

「なっ!？」

「二度と望に近づかないください」

「・・・」

「お願いします」

大樹がわずかに頭を下げた。望にはどうして大樹が下手に出ているのかが分からなかった。

岡田の視線が、大樹から望に移される。まだ憎しみの籠もった視線ではあったが、望は岡田の目を怖いとは思わなかった。しめられた首をさすりながら、望は大樹の背中を見た。今までずっと横に並んでいたのが気付かなかったが、大樹の背中がこれほど大きいものだったのかと望は驚きを隠せないでいた。

「・・・くそっ」

岡田は唾を吐き出すように呟いて、望達に背を向けた。そのまま何も言わずに足早に立ち去っていく。

ようやく張りつめた空気から解放され、望は安堵するように深く

息を吐き出した。

「望」

見上げると、すぐ側に大樹の顔があった。何故か傷ついているような表情で大樹は望を見つめている。

「大丈夫か？」

「あ、ああ」

小さく望が頷く。大樹の目が、望の首元に向けられた。そこには襟足をしめられた痕が赤く線のように残っていた。

大樹の表情がいつそう曇っていく。ゆつくりと、大樹の指がその痕をなぞっていった。優しくかすめていく大樹の指先に、望はくすぐったさを感じた。望が身じろぐと、すぐに大樹の手が離れていく。それが少しもの寂しい。

それでも大樹が側にいることが嬉しくて、望は笑みを浮かべた。

「ありがとな。助けてくれて」

乱れた制服を直しながら、望は大樹を仰ぎ見る。まっすぐな視線が大樹の目とぶつかった。大樹の目の奥に自分の姿を見て、望の心は弾んでいく。

「ほんと、大樹が来てくれなかったらどうなっていたか。俺絶対にもうだめだって思ったもん。いきなり首しめられてさ。息できなくて、その時のことを思い出したように、望の身体が震えた。

怯えていることを隠すように、望は言葉をまくし立てていく。

「でも、大樹が何であそこで頭を下げるんだよ。悪いのはあのバカ田なのに。向こうが謝るべきだろ」

そう言えば謝罪の言葉がなかったと、今更になって望は怒りをあらわにしている。

「岡田先輩は、普段はあんな事をするような人じゃないんだ」

「は？だって俺は殺されかけたんだぞ」

望は大樹のまっすぐな視線に射られるように見られて、口ごもる。

「それはまあ、・・・言い過ぎだけど、でもさ！」

望は大樹の制服に手を伸ばす。自分の味方になって欲しくて、望

は大樹に詰め寄った。大樹ならば絶対に自分の味方になってくれると信じていた。だが、大樹は望の手から逃げるように一歩後ずさる。「大樹？」

「俺、部活があるから」

それだけ言っていると、大樹は踵を返して歩き去ってしまった。

「大樹！」

叫んだ望の声は、大樹を呼び止めるだけの力もなく、むなしく廊下にこだまするだけだった。

「・・・なんで？」

一人、図書室へ向かう道すがら、望は何度もそう口にしていた。ようやく話が出来ると思ったのだ。ちゃんと話せば、以前のように仲のいい友人に戻れると思っていたのだ。

だが、大樹は近づいては来ない。先程は助けてくれたのに、また自分を遠ざける。

どうしてこんな風になってしまったのか、と何度も繰り返し望は自問していた。

「やっぱり・・・」

望は足を止めた。足下を見つめたまま、自答を待つ。

（ホモとかゲイとかってことを気にしてるんだよな、大樹は）

そもそもの事の発端が岡田の智明への告白だったことを望は思い出した。先程の八つ当たりも重なって、望の中での岡田への怒りが膨張していく。

（あいつさえいなければ）

その思いに行き着いてしまった。だが、すぐにその怒りは鎮火する。今更言ったところで、時間を戻すことは出来ないのだ。

「どうすればいいんだろう」

望は重い足取りでまた歩き出した。

校舎内の人影はまばらで、たどり着いた図書室には4人の生徒の

姿が確認できるだけだった。どれも見知らぬ顔ぶれに、望のテンションも下降の一途を辿っていく。

自分だけがひとりぼっちのような錯覚に陥ってしまう。それが無性に寂しくて、苛立たしい。

望は首を手で擦った。ゆっくりと指先で、痕があるだろう箇所を撫でていく。

心配をしてくれていたはずの大樹の顔を思い出した。それはすぐに、視線を逸らし背中を見せる大樹の姿に塗り替えられていく。

「分かんねーよ、馬鹿」

望は図書室のカウンターに突っ伏した。

下校時間となりようやく図書委員から解放された望は、忘れ物を出して教室へと戻っていった。

自分の席から明日提出用の英語のプリントを取り出すと鞆へとしまふ。

さて帰るか、と望が席を立ったときだった。

「まだいたのか？」

がらりと、教室のドアが開けられて、望は声を掛けられた。勢いよく振り返ると、入り口にクラスメイトである三浦敦が立っていた。ゆっくりとした足取りで、敦は望に近づいてくる。

「・・・なんだ、三浦か」

期待はずれというように、望はぼやく。

「ずいぶん言い方じゃねーか」

敦はへらりと笑う。

この敦という男は、常に顔に笑みを貼り付けているような男だった。言うことも半分は冗談が混じっている。クラスメイトの大半と仲良くしているが、誰か特定の深い付き合いをしている友人というのはいないように望は感じていた。広く浅く、という言葉を実践しているようだ。

「図書室に見に行ったらもう鍵が閉まってて誰もいないし、靴はあ

ったから探したぞ」

敦の言葉に、望は首をかしげた。自分は敦に探されるような事をしただろうか。考えても思い浮かばないのでとりあえず本人に聞いてみることにした。

「何か用か？」

「いや、とくに何も無い」

「何だよ、それ」

望は笑う。だがこれ以上の会話が続かないのでさっさと帰ろうと歩き出した。「じゃあな」と敦の横を通り抜けたとき、背後から敦に声をかけられた。

「そっぴい、お前らまだ喧嘩してるのか？」

言われて、ぴたりと望は足を止めた。敦は大輝の事を言っているのだとすぐに分かり、望は顔を曇らせる。

そんな望を、敦は何か含むような笑みを浮かべながら見ていた。

「今時ゲイなんて珍しくもねーだろう。そこらにいる女の子なんてこの手の話は涎垂らす程好きだぞ」

「何・・・言つて・・・」

望の心臓が波打つ。喧嘩していることはクラス中が知っていることだとは分かっていた。今まで始終一緒に連れ立っていた三人が突然二人になったのだ。不信に思わない者などいないだろう。だが、何故敦が大輝の性癖を知っているのか。そのことが望を不安にさせていった。

「まあ、今のは言い過ぎだけだな」

敦はニヤニヤとした顔つきで望を観察するように見ていた。

「でもさ、たかだか恋愛対象が同性だってだけじゃねーか。それだけで朝倉の人間性を否定しちゃ可哀相だろう。お前の男としての器の狭さが露呈するだけだと思うけどな」

敦の説教じみた物言いも、望の耳には届いていなかった。ただ、どうしても聞きたいことだけが頭の中で渦のように巻いている。

「お前・・・」

戸惑いながらも、望は言った。

「知ってたんだ」

「あ？ああ、朝倉がゲイだってことか。まあ、見てれば大体察しはつくよ」

敦の言葉に望むなうなだれた。自分は全く気付かなかった。学校で一番仲の良い友人だと自負していたのに、だ。

「そんなに気にするなって。あいつも上手いこと隠していたからな。気付いていたのは俺くらいなんじゃねーかな。ほら、俺って感受性豊かだから」

敦の冗談も今の望には笑えなかった。自分と敦とを比べて自己嫌悪に落ちていく。

背中を丸めて黙り込んでしまった望を見て、敦はどうしたものかと頭を掻いた。慰めればそれだけ望の気持ちは沈んでいつてしまうだろうと分っていた。

敦は周囲を見回す。教室内には、望と敦以外は誰もいない。

ふと、敦は教室の入り口を見た。目を凝らせば僅かだが、人影が見える。うつむいている望はそれにまったく気が付いていないようだった。

敦は口の端を上げた。しょげている望の肩に、優しく自分の手を置いた。

「気付けば良いってモンでもないだろう。大切なのはどう受け入れてやるかだと俺は思うけどな」

「三浦」

「俺の場合は誰がどんな趣味していようが気にしないけど、それってつまりはその相手のことがどうでも良いってことだろ。池戸がここまで思い悩むのは、朝倉の事を大事に思っているからなんじゃないのか。友達としてさ」

敦の言葉に、望は少し考えるようにして小さく頷いた。

そんな望の姿に、敦は優しい笑みを浮かべる。

「友達にそこまで大切に思ってもらえる朝倉が、少し羨ましいよ」

二度ほど軽く望の肩を叩き、敦は望から手を離していった。

爽やかな笑みを浮かべている敦をみやり、慰められてしまった自分を思うと望は気恥ずかしさを感じていた。いつまでもうじうじと思いついていた自分がとても子供のようだ。目の前にいる敦が、同じ年にも関わらず自分よりも随分と大人に感じていた。

恥ずかしさを紛らわすように、望は少し膨れた面をした。

「お前って、良い奴だったんだな」

わざとそっけない物言いで望は言った。敦は気を悪くした様子なと見せずに短い笑い声を上げた。

「なんだそれ。今知ったみたいな言い方だな」

「今知ったんだよ。三浦ってもっと薄情な奴かと思ってた」

言ってから、望ははつとする。また言わなくてもいいことを言ってしまったと、ばつが悪そうに敦を見た。敦はただ笑うだけで望の言葉を気にしてはいなかった。

「ははっ。確かに俺は薄情な奴だと自分でも思っているけどな」

「でも、こうして俺の相談に乗ってくれてんだから言うほどじゃないんだろ」

「・・・池戸限定だな」

「は？」

敦はにやりとする。

何を言われたのか分らずに、望は呆けたように敦を見た。いつもの軽い冗談でからかわれているのだと思い至り、望は「何言ってるんだよ」と言いながら呆れたように肩をすくめた。敦へ向けていた視線がそれたために、望は敦が教室の入り口をちらりと横目で見たことに気付かなかった。

敦は望との距離を縮めるように一歩前へと出る。

「俺、結構お前のこと気に入ってるんだよな。何処をどう見ても平凡なのに、なんていうかほつとするっていうの？」

「・・・俺に聞くなよ」

「一緒にいると楽しんだよな、池戸って。だからずっと側にいたい

とか思っちゃう」

「え・・・ちよっ、三浦？」

すぐ間近にある敦の身体に、望は戸惑っていた。

「俺もさ、まさか自分がこんな事を考えるようになるとは思わなかったけど、俺は池戸の特別になりたいんだ」

「・・・何言つて・・・」

「大勢いるダチの一人じゃなくて、本当のお前の特別ってやつにさ、なりたいたんだよ。俺じゃあ無理か？朝倉の代わりにはなれないか？」初めて見る敦の真剣な表情に、望は言葉を詰まらせた。自分が女であつたなら、告白をされていると思つても不思議ではない状況だった。つい最近ゲイの存在をリアルに感じてしまっただけに、望は敦から告白を受けているのではないかという気にさえなつてきてしまふ。本当のところはどうなのか、望には分らなかった。確かめようにも、墓穴を掘つてしまいそうで怖くて敦に聞くことなど出来なかった。

二人は、誰もいない教室で少しの間見詰め合っていた。

徐に、敦が近づいてくる。望は身体をのけぞるようにして距離を置こうとした。だが、敦はそれよりもさらに近づいてきた。徐々に顔が寄せられる。敦の真剣な眼差しから、目が逸らせない。

お互いの息が感じるほどの距離まで敦が迫ってきていた。

自分の心臓の音が大音量で聞こえている。

(・・・やば、い？)

望は逃げることも出来ずに、敦の目を見ていた。

ガタッ。

突然の物音で、望は我に返った。

こわばった身体を無理やり動かして、一步後退する。敦から少し離れてから、深く息を吸い込んだ。ゆっくりと息を吐きながら視線を泳がせる。

敦はにやついた顔で、教室の入り口を見ていた。

望も敦の視線を追うように教室の入り口を見る。そこには、大輝がはかま姿で立っていた。ひどく不機嫌そうな顔で望と敦を睨んでくる。その視線の険しさに、望は身体をびくつかせた。大輝の怒りの込められた目を、望は初めて見た。

怯えを見せる望をいたわるように、敦の手が望の肩に置かれた。

大輝の手が、ピクリと震える。

「サボりか？」

敦が聞いた。大輝は敦を睨む。ちらりと、望の肩に置かれた敦の手を見やり、一層顔を険しくさせていった。

敦は何が楽しいのかにたたと笑いながら大輝を見ている。

大輝は敦から視線を逸らした。

「忘れ物をとりに来たんだよ」

小さく呟いた大輝の声に、「あ、そう」と敦はそっけなく答える。

「じゃあ、俺帰るわ」

いきなりそう宣言をして、敦は望から離れていった。側にある机の上に置かれた自分の鞆を手にとると、敦は教室を出るために踵を返した。

「池戸、さつき俺が言ったこと、冗談じゃないからな」

片手を軽く振って、敦は教室の入り口へと歩いていった。大輝の横を通り過ぎる瞬間、くすつと笑みを漏らす。そのまま何も言わずに、敦は教室を出て行ってしまった。

教室には、気まずい雰囲気を残す望と大輝だけが残された。

大輝は敦が出て行った入り口を睨んでいた。

視線を合わせない大輝に、望は落ち着かない気持ちを持て余すように視線をさまよわせている。それでも何とか大輝に近づこうと話しかける言葉を探していた。智明とも話し合ったように、もう一度友達に戻るためのきっかけを作らなければと、望は必死で考えていく。そのことだけに気をとられていたためか、望は大輝の握り締められた拳が震えていることに気付かなかった。

「なあ、大輝」

恐る恐るといった様子で、望は大輝に話しかけた。
名前を呼ばれて、びっくりと大輝の肩が揺れる。

大輝が振り返り、望を見た。久しぶりに二人の視線が合う。大輝が自分を見ていると認識して、望は緊張していた。

「あの、さ……」

次の言葉が思い浮かばずに、望はもごもごと口を動かすだけだった。

「さっきの、どうするんだ？」

唐突に、大輝が聞いてきた。何を聞いてきたのかが分らずに、望は大輝を見る。「さっきの？」と望は大輝の言葉を繰り返した。たつぷりと時間をとってから、先ほど敦が言ってきた告白まがいの言葉のことを大輝が言っているのだと気がついた。

「あれはっ、……いつもの冗談だろ」

きつと冗談だ、と望は自分に言う。

「冗談じゃないと言っていただろう」

大輝の声が、望には冷たく感じた。それがとても、辛い。

「だけど、……そんなこと言ってもさ」

望は弱い声上げる。大輝は望の次の言葉を待つように押し黙ったままだ。

「……いきなりで」

「いきなりじゃなければいいのか」

「なっ、なんだよ！そんな突っかかるなよ！」

「……悪い」

望の逆切れにも似た叫びに、大輝が視線を背けて言った。その姿が、大輝がカミングアウトをした日の朝と重なる。男に告白されるとやはり気持ち悪いのか、そういう趣向の自分は気持ち悪いのか、そう大輝が思っているのだと望は感じた。

望はまた大輝を傷つけてしまったのだと感じて、慌てたように言

いつくろつていく。

「えっと、ほら！告白だったかどうかも分らないだろ。相手はあの三浦なんだし。からかってたんだよ」

「告白にしか聞こえなかったけどな」

「って、お前どこから聞いてたんだよ」

「三浦が俺の話をお前にふった辺りから」

随分と前から話を立ち聞きされていた事に、望は多少の怒りと戸惑いと気恥ずかしさを感じてしまう。だが今は、とにかく誤解を解かなければという思いが望の頭の中を占めていた。

大輝に対して言い訳などする必要もないのだということは望にも分っていた。そもそも、言い訳をしなければならぬような事を自分ではしていない。それなのに、口をついて出てくる言葉は誰が聞いても言い訳としか聞こえないようなものだった。

「三浦はクラスメイトで、友達で、・・・それだけだし、それ以上なんて・・・思えないし。その・・・男だからとか、そんなことだけで言ってるわけじゃないぞ！俺だってそういう・・・その、なんだ。好みっての？そういうのがあることくらいは知ってるし。それで人間駄目ってことになるわけじゃないんだし」

ちらりと、望は大輝を見る。

どうにかして大輝と前のような友達の関係に戻りたくて望は必死だった。

「大輝とだって、こんなことくらいで今までの関係が終わりになっちまうのって、俺・・・嫌だ。嫌なんだよ！」

そうだ、自分は大輝と友達のままでもいいのだ。一番に伝えなければならぬ事をようやく明確に知り得ることが出来て、望は勢いを取り戻していった。

「そりゃ、いきなりゲイだなんていわれたら普通は驚くだろう。だけど俺は、智明もそうだぞ！お前のことはダチだと思ってるんだ！お前の趣味とか何とか、そういうのは関係ないんだよ。それで言ったら智明も大概おかしいだろう。だから、・・・俺らもさ、理解で

きるように努力するし。だから」

言いたい事が上手く頭の中で整理できない。自分で言っている事がどうにも的を得ない事だと分つていても、望はこれ以上上手に話すことなど出来なかった。とにかく自分の中の思いを大輝にぶつきたい。それだけだった。そして一番に伝えたいことだけは、最初から決まっていた。

「前みたいには、戻れないのか？」

望むのまっすぐな視線を受けて、大輝は眉を寄せた。しばらく思案するように黙り込む。

ポツリと、「側にいたほうがまだまし、か」と呟いた大輝の声は、あまりにも小さいものだったために望は正確に聞き取る事が出来なかった。「何だ？」と聞き返す望の言葉を見無視するように、大輝はぼつりと言う。

「いいのか？」

その言葉に、望は大輝を凝視する。

「俺はゲイだ。それでもいいのか？」

望は目を見開き、期待に輝いた目で大きく頷いた。

「気持ち悪くは、ないのか？」

これには望は大きく首を横に振った。

「気持ち悪い分けないだろっ。そりゃ、最初は驚いたけど、大輝は俺にとつて一番のダチなんだから！」

望の力強い言葉に、大輝が少しだけ笑みを浮かべた。心から喜んでいるわけではない少し複雑そうなものであったが、表情が先程よりも柔らかいていた。それを見て取り、望は少しずつ嬉しさがこみ上げてくる。

「・・・今はそれでいいか」とぼそりと呟いた大輝の言葉に、望は何を言っているのかと首を傾けた。

「何だよ、今はって」

「なんでもない」

大輝が笑った。それは、望が久しぶりに見る笑みだった。

（よかった。元に戻れたんだ）

そう思うと、望はこれで良かったのだと心底ほっとした。結果は上出来だと思う。

「それじゃあ、俺は部活に戻るな」

大輝の言葉に、望は「分った」といった。

「俺はもう、帰るよ」

望の言葉に大輝が小さく頷く。

大輝は本当に忘れ物があつたらしく、自分の席まで歩み寄ると、机の中から一枚の紙を取り出した。それが、自分も忘れて取りに来た英語のプリントだったので、望はにんまりとした。

「部活の途中でそれを取りに来たのかよ」

「ちょうど休憩に入ったからな」

「そっか」

望と大輝は視線を合わせて、笑いあつた。

「じゃあな」と大輝が背を向ける。教室を出ようとする大輝に望は声を掛けた。

「大輝っ」

望むに呼ばれて、大輝が歩く足を止める。

顔だけ振り返り、「また明日な」といった。その言葉に、望は顔を綻ばせた。

「ああ！また明日な！」

手をふれば、背中越しに大輝も軽く片手を振ってくれた。

大輝が教室から出て行った後で、望は教室の入り口を見つめたまま、上げていた手をゆっくりと下ろしていった。

久しぶりに心が晴れやかになっていた。望は上機嫌で自分のバツクを取り上げる。

「・・・また明日、か」

大輝との関係が元に戻れたのだと確信できて、望は緩む口元を隠そうともせずに歩き出した。

朝、智明が教室へと入るとそこには見慣れた光景があった。楽しそうに望と大輝が向かい合って話をしている。

桂南高校へ入学してから毎日見てきた光景だ。ここ数日はまったく目にしなかったのだが、その数日が嘘のように、二人は楽しそうに話をしていた。

智明が二人に近づくと、最初に望が智明に気が付いた。次いで大輝が智明を見る。

「はよ」

智明が言くと、二人は同じように挨拶を返してきた。本当にここ数日のことがただの夢だったのではないかと思うほどに、二人は自然な態度で一緒にいた。

「ったく、ここ数日の俺の心労をどうしてくれるんだっ」

怒っているという演技を見せながら智明は大輝の背中を力強く叩いた。「悪かったよ」と大輝は声に笑いを含ませながら言う。

昨日の今日で一体何があったのか、智明も気になるところだったが、こうしてまた三人で一緒にいられることが嬉しくて、細かいことは気にしないようにしようと自分に言い聞かせていた。

全てが元通り、そんな感じを望も智明も受けていた。

「なんだ、仲直りか？」

1 限目が終わった休み時間、敦が望のところにやってきた。すぐ側には智明も大輝もいる。

「良かったな」と言う敦に、望はニツコリと笑った。

「ああ、三浦もありがとな！」

「礼を言われるようなことはした覚えがないんだけどな」

「いいんだよ、俺が言いたいんだから」

敦は爽やかな笑みを浮かべた。

「なら、遠慮なく受け取っておくか」

言ってから、敦はにやりとする。

「ついでに放課後俺にマツクを奢ってくれと、池戸の誠意がよく分るんだけどな」

「何だよそれ。たかりかよ」

「まっさかー。そこまで俺はずうずうしい奴じゃないぞ」

「へえ・・・」

望の白々とした視線を受けても、敦は怯むことはない。

「ま、俺が奢ってやってもいいけどな」

偉そうに胸を張りながら敦が言った。

「それって何か意味があるのかよ」

お礼を強要されている人間がどうして奢ってもらえるのかと、望は敦の不可解な言動に首を捻った。

敦は望を見やり、表情を和らげる。

「強いて言うなら、俺が池戸を誘いたってことだな」

「はあ？」

「深い意味はあってないようなもんだ」

「どっちだよ」

望はただ茶化されているだけなのだと結論付け、敦の言葉を適当に受け流す事にした。

ふと気付くと、大気が敦をきつい眼差しで見ていた。睨んでいるというほうが正しいのかもしれない。敦は、そんな大輝の視線を悠々と受けていた。余裕の笑みさえ浮かべている。言葉にない会話がかわされているようで、何やら物々しい雰囲気か二人の間に漂っている。望と智明は戸惑うように二人を見比べていた。

「ま、気をつけろよ」

敦が望を見て言った。

「何をだよ」

「人生後戻りは絶対に出来ないってことさ」

「はあ？」

「一度変わっちゃまうと、昔とまったく同じにはなれないってこと」

敦の言葉に、望は眉を寄せた。

「縁起でもねーこと言うなよ」

ようやくこうして仲直りが出来たというのに、これが壊れたらお前のせいだ、と望は敦を睨んだ。

敦は相変わらず薄笑いを口元に浮かべている。

敦がちらりと大輝を見た。

「まあ、お友達でいられるのもお前の努力次第なんだろうけどな」
言われて、大輝の表情が陰しくなる。

「せいぜい頑張れよ」

「お前に言われる筋合いはない」

冷たく言い放つ大輝の言葉に、敦はへらりと笑うだけだった。

望と智明は顔を見合わせた。一体二人に何があったというのだ。

今まではただのクラスメイトとしてそこそこ仲良くやってきていたように見えたのに、今はなぜか天敵を見るような目で相手を見ている。とくに大輝は敦の事を嫌っているようなそぶりをしていた。

分けが分らないまま、望はただ成り行きを見ているしか出来なかった。

「席に着けよ」という教師の声で、とりあえずこの場は強制終了される事となるまで、二人のにらみ合いは続いていた。

授業中、ちらちらと望は大輝の様子を伺っていた。特に変わった様子はない。今日の朝はここ数日続いていた白々しい雰囲気が一掃され、これまでの仲の良い友人という関係に戻れたと思っていた。

（これで良いんだよ）

望はこれ以上考える事をやめるように、軽く頭を振った。余計な雑念を捨てようと自分に言い聞かせる。

そうしてまた大輝の様子を伺うように見ると、不意に、大輝と目が合った。

大輝は口の端を上げて笑む。

その表情を見て、望は不自然にならないように心がけながら黒板に向き直った。

どうしてだか、大輝の顔を直視できない。

無理やり向けた視線の先、黒板にはすでに理解不能な数式が嘉吉慣れられている。しばらくにらめっこをしていた望は、どうにもそれらの数式が理解できずに、諦めてペンを置いた。分らないところは後で大輝に聞けばいい。そう思うと今授業に付いていけなくてもそれほど焦る気持ちは生まれなかった。

持つべきものは友人だ、と望はほくそ笑む。

望はまた、大輝を盗み見るように目線だけを大輝に向けた。大輝はまっすぐ前を向いている。それが少し寂しいと思っている自分に気付き、望は戸惑いを感じてしまった。

やはり、何かが自分たちの中で変わってしまったのかもしれない。それが何なのかが分らない。

（俺・・・なんか変だ。疲れてるのかな）

望は言い知れぬ心のざわつきを意識的に無視するように、もう一度ペンを握りなおした。真っ白いノートを見下ろして、よしっと自分に気合を入れた。

「よつつ」

片手を上げて敦が望の前に立っていた。

放課後の図書室。望は図書委員の仕事を真面目にこなすために入り口近くにあるカウンターの中でぼんやりと時間をやり過ごしているときの事だった。

図書室には三人ほどの生徒がまだ残っている。内二人は休む暇なく勉強をしているようだった。もう一人は机に突っ伏している。一時間ほど前から殆ど身動きしないので、熟睡しているのだろう。そ

れくらいなら家に帰ってから寝ればいいと思うのだが、名前も知らないその生徒へ忠告をする事など望にはできなかった。いびきをかくことがないのでとりあえず放っておいてある状態だ。

敦はカウンターに肘を置き、望の方へと身体を寄せてきた。

「暇そうだな」

眠気の混ざる望の目を覗き込み、敦がにやりとする。

「お前もな」

望は馬鹿にされているらしいことにむっとしながら受け答える。

「今日はバイトがないからな、暇なんだよ」

「三浦、バイトしてるんだ」

「ああ」

「何やってるんだ？」

「・・・店員」

「何の？」

望の問いかけに、敦の顔から笑みが消えていった。ふいっと顔を背けて、ボソリと呟く。

「花屋」

「・・・は？」

敦はがなるように繰り返した。

「花屋だよ！何か文句あるのかよ！」

突然の敦の豹変に驚いたように目を丸くして、望は「へえ」と声を漏らした。

花屋か、と呟くと、じろりと敦に睨まれる。

「なんでまた、そんなところに」

「親戚がやってる店なんだよ。いいだろ、別に」

「俺、何も悪いとかいってないだろ」

「似合わねーとか思っているだろ」

「それは・・・まあ」

望に言われて、「やっぱり」と敦はふてくされたような顔をした。どうフオローをしたらいいのかと考えてしまう。そっぽを向く敦

が子供っぽくて可愛いとすら思えてしまい、これだけは絶対に言うてはいけないことだと自分に言い聞かせた。

「いいんじゃないか、花屋。うん、楽しそうだし」

「池戸、お前適当に言ってるだろう」

「いや、・・・まあ、えつと、智明とかに言ったら喜んで買いに行きそうだな。常連客になるかもしれないし」

「早瀬の奴が花なんて買うのか？」

「結構買みたいだぞ。なんでも、女に渡すプレゼントで一番お手ごろなんだってさ。ほら、あいつが付き合うのって年上ばかりだろ」

話に聞く限り、年上というだけでは割り切れない年齢も多少混じってはいるが智明はそれもまた魅力的なのだといっていた。望には理解できない世界だ。

「物を用意するよりも小さな花束を贈ったほうが喜ばれるんだってさ」

「そんなもんかね」

理解しきれないといった様子の敦に、望は苦笑する。

『花束も大きかったり豪華だったりすると効果が半減するんだ。学生の俺がない小遣いから頑張って用意したっばい位の小さいやつの方が効果的なんだよ』と得意げに語っていた智明を思い出す。そうやって高校生の智明に手玉に取られる女性が世の中にはいるのだ。それも一人二人ではないところが、信じられない。智明が凄いのか女性たちが騙されやすいのか、そこら辺は分らないが望からすれば分らないほうがいいのかもしれないと思ってしまう。

「早瀬は今日も女のところか」

敦の言葉に望は頷いた。

「あいつは忙しい奴だな」

「まあな」

「時間の使い方が間違っている気がするんだけどな」

「ははっ、確かにな」

望と敦は目を見合わせて笑いあった。

本の貸し借りをを行うカウンターを占領するわけにもいかなかった
ので、望は敦をカウンターの中へと誘い入れた。二人で並んで座り
ながら、他愛もない話を重ねていく。

よく見るテレビ番組や、好きな本、雑誌、音楽。話していくうち
にお互い似たような趣向を持つていることに気が付いた。共通の話
題があれば、それに付いて語り合う。持ち合わせる感想も似ていれ
ばそれだけ話は盛り上がっていった。

キンコンカーンコーン。

チャイムの音が図書室内に響き渡る。そこでふと、ここが図書室
である事を望は思い出した。自分が図書委員として放課後の図書室
の守番をしていることも同時に思い出す。ついつい仕事を忘れて話
し込んでしまったと、望は少しだけ反省をした。

改めて図書室内を見回すと、室内には望と敦以外の人の姿が見当
たらなかった。

いつの間にか、利用者全員が帰ってしまっていたらしい。

窓から差し込む夕暮れの赤い光が、図書室内を情緒的に照らして
いる。

壁にかけられた時計は5時半を過ぎたところだった。下校時刻だ。
望はゆっくりと立ち上がる。室内をもう一度見回して、誰もいな
いことを確認した。

振り返ると、敦も立ち上がっていた。自分の鞆を手にとって、望
にも鞆を差し出してくる。

「帰るか」

敦の言葉に望は頷いた。

窓の戸締りを確認した後で、カウンターの隅においてあった鍵を
取り上げた。

「そういえばさ」

敦は思い出したように口を開いた。

「池戸って今まで付き合ってた子とかいるのか？」

突然の敦の質問に、望は思考が一瞬停止してしまった。すぐにむつつりとした表情で敦をねめる。

「どうなんだ？」とさりげなさを装いながらも尚も聞いてくる敦に対して、望はもごもごと口を動かした。

「・・・いねーよ」

「ん？」

「いないよ！悪いかよ！」

開き直ったように叫ぶ望を見て、敦は嬉しそうに笑った。それが望には馬鹿にされているのだとしか思えずに、苛立ちと恥ずかしさで逃げ出したい気分にならせていた。

「なんで急にそんな事・・・」

「いやー、ほら、早瀬も朝倉もモテるだろ。池戸もあいつらに女を紹介してもらっていたりするのかと思ってさ」

確かに、智明はモテるといってもいいのだろう。望が知る限りで智明から女性の影が切れたことがないのだ。しかも、一人に特定された事すらない。だが。

「・・・大輝は」

そこから先の言葉が、望には出てこなかった。

「朝倉もかなりモテるだろ。他校にもファンはいるし、剣道でもそうだけどあいつ目立つからな」

朝倉の言葉に、望は力なく頷く。望も大輝にファンの女の子たちがいることは知っていた。手紙を受け取っているところも何度か見ている。だが、大輝に女性の影がちらついたことは今まで一度もなかった。

自分が知らないだけなのか、それとも大輝がゲイだからなのか。それは望には分らない。

「大輝に・・・彼女っていたのかな」

不意に疑問に思ったことが口を付いて出てしまった。望は慌てて

口元を手で押さえたが、敦にははつきりと望の声が聞こえていた。
「いただろ」

当然のことのように敦が言う。

「でもっ、あいつは・・・」

「中学のときにも何人かいたんじゃないかな。今はどうか知らないけど」

「え、・・・中学？」

「俺、朝倉とは同じ中学出身だから。噂は幾つか聞いてるんだよ」

「え！？・・・そっか、大輝と同じ中学だったんだ」

「殆ど話したことはなかったけどな」

「・・・へえ」

知らなかった、と望は思った。それが何故だか疎外感を感じてしまふ。

「しかし、そうなると池戸はまだ童貞か」

「は！？なっ・・・なにを」

さらりと言われた言葉に、望は顔を赤くして口を金魚のように閉める。

敦に笑われて、望は更に顔を赤く染めていった。

「悪いかよ！」

恥ずかしさを隠すように望が怒鳴った。

「悪くないって」

敦は楽しげに声を弾ませる。

「むしろ良いかも」

「は？」

「いやいや、こっちの話し」

忍び笑いを浮かべたままの敦は、それ以上の説明をすることもなく、望に背を向けた。図書室のドアにゆっくりと手をかける。

未だに小刻みに肩を揺らす敦の背中を、望は力いっぱい睨みつけていた。

がらり、と音を立ててドアが開かれる。

敦は一足先に廊下へと出ていた。その後を追うように望も図書室の外へと歩き出る。

廊下へと足を踏み出して、望は立ち止まった。

（・・・あれ？）

僅かな疑問が胸の奥に浮かび上がる。

「どうした？」

「・・・いや」

望は首を傾げる。はつきりとしたことが言えずに、敦には何でもないと言った。

だが、なぜだか次の一步が踏み出せない。

何が気になるのか、望は視線を周囲にめぐらしていく。特に変わったものはない。望と敦以外の人影は見当たらない。

では何だ？

望は自分を落ち着かせるようにゆっくりと息を吸い込んだ。

かすかに、見知った匂いが・・・する気がする。

だから何なのだと、望は自分に聞いてみた。だが、答えは何も返ってこない。

ただ、頭に思い浮かぶのは大輝の姿だった。

見た限りここには大輝の姿はない。先ほどまでいたとして、自分に声を掛けずに帰ってしまうような薄情な男ではない事を望は知っている。

やはり気のせいだと、望は思った。

急に黙り込んでしまった望を心配するように敦が顔を覗き込んでくる。

「大丈夫か？」と気遣う敦に笑みを見せ、望は歩き出した。その横を敦が歩く。

二人は並んで昇降口へと歩いていった。

望と敦が昇降口へ向かうために階段を降りていく。

それを見届けるようなタイミングで、物陰に潜んでいた大輝が姿を現した。

二人の後ろ姿を、大輝が見つめていた。

敦よりも5センチほど低い望の背中を食い入るように見る。

握り締められた手に、いつそう力が込められた。

「・・・望」

搾り出すような大輝の声は、誰に聞かれる事もなく、人気のない廊下に伝わり、消えていった。

大輝の様子がおかしい。

望がそのことに気が付いたのは昼休みの最中だった。

いつものように智明と三人、中庭で昼食をとっていた。三人で話をして、笑いあう。いつもと同じ光景なのだが、大輝が自分を見ようとしないうとしない。

思い返してみると、朝から大輝は望と目を合わせようとはしなかった。

言葉は交わすのだ。大輝は目の前で笑みをみせている。だが、自分を見ない。智明のことは見るのに、望のことは見ようとはしない。そのことに気付いたとき、望は心の中に一つ二つと小さな錘が積みあがっていくような感覚に襲われていた。

智明の様子は普段と代わりがないために、きっと大輝の異変には気づいていないのだろう。

伺うように大輝を見る望だったが、聞き出すきっかけをつかめずに、結局うやむやのまま昼休みを終えて教室へと戻る羽目になってしまった。

そんな状態が一日、二日と続いていくと、望の苛立ちも少しずつ表面化していくようになった。

無理やり大輝に話を振ってみては、反応を伺うように観察する。

大輝は望を無視することもなく、普通に受け答えをしてきた。ただ、望を見ようとしただけなのだ。それが望にとっては腹立たしいことだった。

「何かあったか？」とそれとなく聞いてみれば、「別に何も」とそっけない返事が帰ってくるだけだ。そのときすら、大輝は望から顔を背けていた。

「俺を見ろよ！」と怒鳴りたい衝動に駆られる事もあったのだが、

どうにも恥ずかしい台詞のように思えて、とてもではないが望には
いえない言葉だった。

智明に救いを求めようにも、智明は気付いていないようだし、望
にはどう説明していいのかも分らない。

「・・・どうすりゃいいんだよ」

放課後の誰もいない教室で、望は頭を抱えていた。

今日は特にすることがない。時間を持て余して、だが家に帰る気
分にもなれずにこうして教室で時間を潰していたのだ。

やることがないと、考えてしまうのは大輝のことばかりだった。

突然のカミングアウトから全てが一変してしまったかのようだ。
今まであれほど仲の良い友人だった大輝のことが、今では何を考え
ているのかさっぱり分らない。どこか遠くにいる人のように感じて
仕方がなかった。

（元に戻るなんて、無理なのかな）

望は以前敦から言われた言葉を思い出していた。

「なんでこんなふうになっちまったんだろっ」

声に出して、自分自身に聞いている。当然、返ってくる答えなど
ない。

だが、大輝との関係が変わってしまった瞬間は分っている。

「・・・ゲイ、か」

いまいち実感のない事実には、望は顔をしかめた。

男を好きになるということは、本当のところどういうことなのだ
ろっか。女を好きになるのと同じ事なのだろう。相手を人として
みれば、性別など関係ないのかもしれない。そう考える事も出来な
くもないのだが、やはり感情が受け入れられない部分が望の中には
あった。

「好きって・・・なんなんだろうな」

（大輝にもいるのかな・・・そういう好きな人とか）

いたら、その相手は男なのだろう。それは友人とは違う立場にな
るものなのだろう。違うのならば、自分とその相手はどう違うの

だろうか。

（大輝に好きな人が出来たら、俺というよりもそいつといたいと思うんだろっか・・・いないのかな、そういう人って・・・いたらどんな人なんだろっ。大輝と並んでもきつと釣り合うぐらいの人かな俺みたいになんてじゃなくて、かつこよくて・・・）

そこまで考えて、望は我に返った。

「・・・なんでっ」

（俺とそいつを比べないといけないんだよ！）

馬鹿か、と自分に悪態をつく。

「あー・・・もう！わけ分んなねーよ！」

望は降参とばかりに足を投げ出し、椅子の背もたれに体重を傾けた。

誰でもいいから助けてくれよ！

心の中で叫ぶ声は、誰も受け取ってはくれない。

「俺もゲイにでもなれば大輝の気持ち少しは分るのかな・・・」

自分の言葉に、望は激しく頭を振った。

どうにも思考がおかしな方向へばかり向かってしまう。やはり疲れているのだと思った。だからくだらない事まで思い悩んでしまうのだ。

「はあー、・・・ったく、俺の気も知らないでさ」

ここにはいない大輝を思い、望はいつそう顔を曇らせていった。

「あれ？」

誰もいないはずの教室で、望は声を掛けられた。

びくりと肩を震わせて、望は振り返る。

丁度教室へと入ってきた敦と目が合って、「なんだ、三浦か」と望は肩から力を抜いていった。

「まだいたんだ」

望の前に立った敦が、見下ろしてくる。

「おう」

「どうした？」

敦が聞いてきた。最近そうやって敦に聞かれることが増えている気がした。

「朝倉とまた喧嘩でもしたのか？」

聞かれた言葉に、望はまじまじと敦を見た。

智明は気付いている様子を見せなかったのに、なぜか敦には大輝の異変が分っていたようだ。自分たちの関係が少しおかしい事も気づかれていたらしい。さすが「自称感受性豊かな男」だけのことはある。渡りに舟とばかりに望は敦の腕に飛びついた。

自分でも説明しきれないことなので、正直いつて敦に全てを理解してもらえとは望もそこまでは期待をしていなかった。だが、敦は望の言いたいことの要点を正確に聞き取っていく。それだけで、望は敦に対して信頼を深めていった。

「変だろ？」

真剣な顔で言うてくる望を前に、敦の表情は次第ににやついたもののへと変わっていった。

敦の手が望の肩に置かれる。

「あいつにもいろいろあるんだよ」

「いろいろって何だよ」

「それは、まあ・・・想像の域をでないから、俺の口からは言えないけどな」

「意味分んねーよ」

「まあまあ」

敦が望の肩を軽く叩く。

「少し時間をやれよ」

「・・・」

「そつすりゃ、朝倉も少しは落ち着くだろっさ」

仏頂面の望を苦笑したように敦が見る。

「しかし、池戸っていつも朝倉の事考えてるよな」

「え!？」

驚いたように望は目を見張った。

「そうか? そんな事ないと思うけど」

「いいや、そうだね」

間違いなくそうだと敦が言葉を付け加える。

「池戸にとっての一番は、とりあえず朝倉なんだなと思うよ」

「だって、・・・大輝は友達だし」

「ランク付けで言ったら一番が付くだろ」

敦の言葉に望は困ったように口元をひくりとさせる。

「早瀬もいるから、俺は池戸にとっては三番目以下ってことか」

「俺はっ、・・・ダチに順番なんてつけない!」

「それなら」と敦は望に身を寄せていく。

「俺も朝倉と同じ場所に置いてくれるか？」

敦の目が意外にも真剣で、望はその目に引き寄せられる。「だから、俺は・・・」と弱い声で弁解しようとしても、はっきりと告げることは出来なかった。

確かに、望の中では敦よりも大輝の存在のほうが大きいのだ。それをランク付けと言われるとどう否定していいのかが分らない。

望は敦から逃れるように俯き、視線を逸らした。

「池戸」

敦が望を呼ぶ。

(何で俺、・・・こんな、ドキドキしてんだよ!?)

自分の中に渦巻く感情が理解できずに、その正体すらも分らずに望は困惑していた。

不意に、望は腕をつかまれて引き寄せられた。強引なその力に引きずられるように椅子から立ち上がり後ろへと倒れこむ。

何かにぶつかり、望は倒れずに済んだ。

恐る恐るといった様子で、望が振り返る。そこには大輝がいた。望の腕をしっかりと掴んだまま離さずに、大輝は敦を睨みつけていた。

突然の大輝の出現に、望は軽いパニックを起こしていた。先ほどの敦との会話を聞かれていたのではないかと思うと、どうにも顔をあわせるのがためらわれてしまう。

何も言わずにいる大輝の存在も、少し怖かった。つかまれた腕が痛い。

大輝の視線を受けて、敦の眉がピクリと動く。そしてにやりと口元を歪めた。

「どうした？朝倉」

明るい声で敦が話しかけた。

大輝は無言で、敦を睨む目を細めた。答えるつもりがないのか、大輝は掴んでいた望の腕を引いた。

「た、大輝？」

「望に近づくな」

大輝は敦だけを見て、言った。陰を含むその声は、地の底を這うように低く冷たいものだった。

敦は何がおかしいのか、楽しげな表情で大輝を見ていた。にやりと口元を歪める。

「お前に言われる筋合いはないと思うけどな。保護者でもないのに、池戸の交友関係にまで口を出す権利がお前にあるのか？」

敦に問われて、大輝は忌々しいといったように表情を陰くさせ去っていった。

「お友達に新しく仲の良い男が増えていくのが気に食わないのか？はっ、小学生の嫉妬かよ」

敦は嘲る様に大輝を見た。

何も答えないところを見ると、大輝は反論するだけの材料を持ち合わせてはいないのだろう。そのことが敦に勢いを付けていく。

「しかも、お前は自分勝手に池戸を振り回している。池戸が悩んで

いるのをお前だって分っているだろう」

敦は大輝を追い詰めるように言葉を並べていく。

「友達のお前が勝手に怒ったり離れようとしたりするから、訳が分らずにいるんだ。なあ、いい加減にしろよ、朝倉。お前の勝手な都合で周りを振り回すんじゃないよ。言いたい事があるならはつきり言えばいいだろ。友達なら悪いところは直して、また付き合っていけばいいじゃないか。何も言わずに拒絶するだけってのは卑怯だろ」

敦の強い視線が大輝を捕らえる。

大輝は何も言わずに、敦から視線を逸らした。

「頭冷やして考えて、話し合えよ。池戸も、この際言いたいことは全部言っちゃえ。それで朝倉が怒るようなら、こんな奴捨てちまえばいい」

言いたい事だけ言い終えると、敦は小さく息を吐いた。

「池戸、この馬鹿の席が空いたらそこに俺を入れてくれよ。俺は朝倉と違って後のフォローもマメだから」

敦の言葉に、大輝の表情がいつそう険しいものになっていく。それを鼻で笑い、敦は片手を振った。

「じゃあな」と、望の横を通り過ぎていく。

望は出て行く敦の背中に呼びかけてみたが、敦は振り借りもせず片手を振って見せるだけだ。後を追おうと一歩足を踏み出して、いまだに大輝につかまっていたままの腕が望の歩みをさえぎった。完全に敦の姿が教室から消えてしまうと、後に残ったのは怒ったような顔をした大輝と戸惑うだけの望の二人きりだった。

「あの・・・腕」

遠慮がちに、望が大輝に言った。

捕まれたままの腕と大輝との顔を交互に見る。

大輝ははっとしたように望の腕を開放した。

強く握られていたためか、突然開放された腕は血液が一気に流れ出し、じんわりとした痺れが広がっていく。その不快な感覚を紛ら

わずやうに望は腕を擦った。

その様子を見ていた大輝が、あからさまに顔を背けた。

「・・・悪い」と小さい声で謝られて、望は顔をしかめた。何に對しての謝罪なのか分らない。確かに謝って欲しいこともあるのだが、どうにも素直に受け入れられる謝罪ではない気がしていた。

「何がだよ」

気が付けば、望は不機嫌な声を出していた。

「お前、最近そればっかだ」

望むの言葉に、大輝は視線を逸らしたままボソリと呟く。

「気持ち悪い、だろ」

望の腕を擦っている手をちらりと見る。

(・・・あつ)

望は息を呑んだ。自分がなぜだか大輝を傷つけてしまったということに気が付いた。友人としての関係がどうにもぎこちなくなっている今、望はここで大輝を失ってしまうのではないかと思った。大輝は自分がゲイであるという事について、自分たちに引け目のようなことを感じているのだと望は思っていた。だから、これ以上そのことでお互いの間の溝が深くなってしまうと、本当に友人としての大輝を失ってしまうと思に至ることは当然の事だ。

(嫌だ！)

望は強い衝動に駆られていた。大輝を失いたくない、それだけの思いで望は大輝の右手を掴んだ。

「気持ち悪くなんてないぞ！」

大輝の手を強く握り締め、望は叫んだ。嘘じゃない事を分つてもらいたくて、望はまっすぐ大輝の目を見つめる。その強い眼差しに握られた手の力強さに、大輝は息を呑む。驚いて見開かれた目が、つかまれた手を、そして望の目に向けられる。

二人の合わさった手の中が、じんわりと汗ばんでくる。それがどちらのものかは分らない。

大輝はごくりと唾を飲み込んだ。

徐に、つかまれていた手を引き寄せる。突然の事に、望は抵抗することなく引き寄せられ、気がつけば大輝の腕の中にいた。

大輝は左手を望の背中へとまわし、抱きしめた。握られていた手を、強く握り返す。

（え？・・・何？）

望は現状の把握が上手く出来ずに硬直していた。

抵抗しない望を、大輝は両手で強く抱きしめる。そっと顔を寄せ、大輝は望の耳元で囁いた。

「望」

熱を帯びた吐息が、望の耳元に吹きかけられる。

望の身体がしびれるように震えた。

抱きしめてくる腕が、自分とは比べ物にならないほど逞しく感じる。少し身体をよじり抱きしめる腕をはがそうとしても、大輝の腕はびくともしないのだ。ぴたりと張り付いた大輝の胸板が、熱い。

自分のものが大輝のものかわからない心が耳に届く。

「た、・・・大輝」

弱弱しい声が、望の口からこぼれた。

すぐ側を感じる大輝が自分の知る大輝ではなくて、恐ろしさが生まれてくる。

名前を呼ばれ、大輝は我に返ったように望の身体を押しつけるように引き離れた。触れていた手を引き込めて、固く拳を握る。

「大輝？」

望の声に、大輝は歪められた顔を向けた。

「悪い」と呟き、すぐに視線をそらされる。

大輝は何もない床を見つめていた。喉に力を込めて、声を振り絞る。

「やっぱり、・・・今までのようには出来ない。もう・・・限界なんだ」

大輝は固く瞼を閉じた。とても望の顔を見ることが出来なかったのだ。

「・・・大輝、・・・なんでだよ！お前、一体どうしちゃったんだよ！」

「悪い」

「悪い、だけじゃ分んねーよ！分るかよっ、そんなんでも納得なんて出来るわけないだろ！」

「好きなんだよ！」

望の畳み掛けるような言葉に押されるように、大輝が叫んだ。
何を言われたのか分らずに、望はきよとした顔をする。

大輝は相変わらず何処を見ているのか分らない目線だ。

「・・・何、言って・・・」

「好きなんだ」

静かに、大輝が繰り返した。

ゆっくりと大輝が望を見る。

望は息を呑んだ。

一体、大輝が何を言い出したのか望には分らなかった。言葉の意味は分っている。だが、それを理解できるだけの思考回路が望の中では働いていなかった。感覚が麻痺してしまったかのように、何も感じない。

「・・・誰を？」

「お前だよ」

「・・・冗談」

「なわけあるか。俺は、望が好きなんだ」

大輝の言葉に、望は息を呑んだ。

「好きなんだ。ずっと、好きだったんだ。だからお前と友達でいるのは・・・きつい。俺にはもう、それを続けていくのは無理だ」

大輝が奥歯を噛み締める。

（・・・こういうの、見たことあるな）

ぼんやりと、望は目の前にいる大輝を眺めていた。

今この状況が、まるでドラマか映画を見ているような錯覚を覚え

ていた。大輝の存在がスクリーン越しに映し出される俳優のように遠い存在に感じてしまう。大輝の声がスピーカーを通したような少しエコーの掛かった音に聞こえていた。

反応を示さない望に、大輝は乾いた笑みを浮かべた。

「別に返事を期待しているわけじゃない。俺の想いが叶うなんて、はじめから思ってたないし、お前に無理強いするつもりもない。ただ・・・もう隠しているのが辛くて、何もないふりをして望の側にいるのが耐えられないんだ。いつか絶対に・・・限界が来る。いや、もう来てるんだ」

大輝がふっと、柔らかい笑みを見せる。

「ただ言っちゃってしまいたかっただけなんだ。・・・忘れてくれ」
そう言い残して、大輝は教室から出て行った。

望の目が、大輝の背中を追う。

だが声を掛けることは出来なかった。呼び止めることが出来ず、ただ望は視界から消えていく大輝の背中だけを眺めていた。

夕暮れに染まる教室。

日は完全に落ち、室内に薄暗い闇が広がっていく。

一人残された望は、立ち尽くしたまま教室の入り口を見つめていた。

「・・・なんだよ」

ややあと、望が呟く。

力尽きたように、望は教室の床に座り込んでしまった。

「なんだよ、それ」

言葉を向ける相手は、すでに教室から姿を消している。

望は床に敷かれたタイルを見つめていた。

「忘れるって・・・なんだよ」

望の顔が歪む。気を抜いたら何を口走るか分らずに、望は唇を噛み締めた。

朝の教室はいつも賑やかい。

挨拶や昨日のテレビの批評を交わし、仕入れてきた情報のやりとりでクラス内は活気付いている。それも担任教師が教室に入ってくるまでなので、皆時間を惜しむように口を開いては言葉や笑いを吐き出していく。

そんな明るさに満ちた教室内で、望は一人、憂鬱そうにうな顔で垂れ机に突っ伏していた。

智明が登校してきた事にも気付かないほどに、望は自分の世界に引きこもっていた。

声を掛けても反応がない、顔も見せない望を見下ろして、智明はため息をつく。

ちらりと視線を横へ向ければ、二席空けた横で大輝が気難しげな顔で黒板を睨んでいた。先ほどこら、両者はピクリとも身体を動かさない。

智明はもう一度大きなため息を落とし、徐に拳を振り上げた。それほど力を込めずに、ためらうことなく拳を望の頭上に振り落とす。ゴッツと音を立てて、智明の拳は望の頭に命中した。

「おきろっ」

智明の声に、望はようやく重い頭を上げた。

「はよっ」

気を使って智明が明るい声を出した。

望は地を這うような低く擦れた声で挨拶を返してくる。

「朝から暗い奴だな」

智明は腰に手を当てて言った。

「何かあったのか？」

言って、智明はちらりと大輝を見た。

望が智明の視線を追う。大輝が視界に映ると、望は身体をびくり

と震わせる。それを智明は目ざとく気が付いた。

絶対に何かあったのだと、智明は確信した。

ようやく以前のように三人で楽しくやれると思っていた矢先の事だ。自分が放課後のデートを楽しんでいる間にその期待が泡のように消え去ってしまったようで、その原因がいまいち把握しきれない事に智明は苛立ちを感じていた。だが、二人の状況から、今度は今まで以上に深刻な事態になっているらしい事は感じ取れていた。

とりあえず原因究明が第一だろう。智明は一番口を割りやすそうな望に的を絞り、何があったのかを聞き出そうと口を開いた。

「・・・一体」

「席に着けよ！」

智明の声を重なるように、担任教師のかなり声が聞こえた。

周囲は慌ただしく椅子を引き、それぞれの席へと戻っていく。

智明は軽く舌打ちをして、望の側から離れて自分の席へと戻っていった。

「んで？」

昼休み。

4限目が終わつたと同時に智明は望を引つ立てるように中庭へと連行した。

行く途中で購買により、適当に智明は二人分の昼食を買い込んだ。それを目の前に広げながら、胡坐をかいた膝の上に手をのせて気合を入れる。

「何があつたんだよ。お前も大輝も、今まで以上におかしいぞ」

大輝の名前が出た瞬間に、望はいっそう顔を暗くさせた。

一体二人に何があつたのか、智明は思い当たる事がなくて戸惑っていた。望の表情を見る限り、どうにもただの喧嘩ではない気がしてならない。

問いかけても望は押し黙ったままつむくばかりだった。

智明は苛立ちを募らせながら、乱暴にパンの袋を破いた。大口を

開けてパンにかじりつく。望は手に持ったパンを見下ろしたまま動かなかった。

（・・・持久戦か）

智明は心の中でため息を落とす。辛抱強く待つということが苦手な自分が何処まで望の言葉を待てるだろうか。すでに大輝を一発くらいい殴ってでも口を割らせたい気分だった。だが、この昼休みくらいは待ってみるか、と、智明は無言でパンを口の中に運んでいった。

「おっ、旨そうだな」

突然の背後からの声と、伸びてきた手に智明は振り返った。そこには敦が立っていて、顔を綻ばせながら足元に転がっているパンを見下ろしている。

智明が何かを言う前に、敦は勝手に智明と望の間に腰を下ろした。持参したパンを膝の上に置き、敦は手に持っていたコーヒー缶の蓋を開けた。

「三浦、悪いけど俺らちよつと話があるんだよ」

智明が声を低くして言った。暗に席を外せと伝えたはずなのだが、敦は知らぬ顔でパンの袋を開けると豪快に食べ始める。その様子に智明は苛付いた。

「三浦っ」

鋭く名前を呼ぶが、敦は智明を見ようとはしなかった。隣でうつむいて座る望に視線を定めている。

「朝倉に告白でもされたか？」

敦の言葉に、ようやく望が顔を上げた。驚いて目を見開いたまま敦を見る。

「・・・やっぱりか」

望の顔を見て、敦は笑みを引つ込めた。珍しく真面目な表情で姿勢を正す。

「え？何？告白って・・・え!？」

智明は混乱した頭で、望と敦とを交互に見比べていく。

「大輝が・・・告白、したのか?・・・望に?」

智明の言葉に、望が弱弱しく頷いた。そしてすぐるような視線を向けてくる。

「何で・・・大輝が」

智明はまだ信じられないといった様子で呟いた。

それを望も知りたかった。どうして自分のことを「好きだ」と言ったのか。望には大輝の気持ちが信じられなかったのだ。

「池戸のことが好きだからだろ。ってか、好きじゃなきゃ告らないだろう」

当然とでも言うように敦が言った。最後の一口を口の中に放り込んで、飲み込んでいく。

「まあ、俺もちよこちよこと挑発はしていたし、友達ごっこも長くは持たないだろうと思っていただけだな。いやー、思った以上にあっけなかったな」

敦が笑う。

智明は、怪訝な顔つきで敦を見た。

「お前、知ってたのか？」

「ん？」

「大輝が・・・その、望の事を好きだった」

「ああ」

「・・・いつから」

「俺が気付いたのはゴールデンウィーク明けてくらいだな。なんとなくゲイだろうとは思っていたけど、あいつ結構分りやすいぜ。目がいつも池戸を追っているんだ。他の奴らとじゃれてる池戸を見てるときなんてかなり不機嫌そうだしな」

けたけたと敦が笑う。すぐに表情を引き締めると、敦は望を見た。

「朝倉は本気だと思うぞ」

敦は静かにそう言った。

望はびくりと肩を震わせる。恐る恐るといった様子で望は敦を見た。

「いきなりダチたと思っていた奴に告られれば、そりゃ戸惑うのが

普通だろう。相手が同じ男なら、気持ち悪いって思うのも分らないでもない。でもな」

敦のまっすぐな視線が、望の心に突き刺さる。

「池戸が朝倉の事をダチにしる別の存在として思っているにしろ、大切だと思うならちゃんと真剣に考えてやれよ。それが礼儀つてもんだ。朝倉の事を思うなら、はっきりとけじめはつけてやれ。気持ちを知った上で、良い友達でいましょうなんて女みたいに都合のいいこと抜かすなよ。それが一番朝倉にとって残酷な事だと俺は思う」

敦ははっきりと言い切った。冷たい言い方のようにも聞こえる敦の言い分に、智明は責めるような視線を送ってくる。それを敦は気付かない振りをした。

「・・・俺」

望は固く手を握り締めた。次の言葉が出てこない。頭の中には何も浮かんで来なかった。

「とりあえず、お前がどうしたいかをまず考えてみるよ。その上でダチとしか思えないなら、そのダチのために一番いい方法を考えてみな」

「・・・でも、さ。俺、よく分らねーんだ」

ぼつりと、望は言った。

望の言葉に、敦は片方の眉を器用に上げる。

「何が分らないんだ？」

「・・・それが分らない」

望は意気消沈といった様子で肩を落としている。

敦と智明が目を見合わせた。

しばらくの沈黙の後で、ゆっくりと智明が口を開いた。

「望。お前さ、嫌じゃなかったのか？」

智明の言葉に、望は何を言われたのか理解できずに首をかしげた。「だから、相手が太輝っていても男なわけだろう。一度経験した俺から言わせてもらえれば、そういうことがだめなら絶対に嫌だっ

て思うはずだ。俺は本気で気持ち悪かったぞ。張り倒して、二度とその面を見ないで済むように消し去ってしまいたくなるくらいに不快だった。そういうのが、ないのか？」

聞かれて、望は思案した。

「好きだ」といわれて、ただ驚いた。突然の事で、あの場では何も言う事が出来なかったのだが、こうして思い返してみると気持ち悪いといった感覚は望の中にはなかった。ただ、思い出すのは自分に背を向けた大輝の後姿だけだ。それが、どうしても悲しかった。

「・・・ないんだ」と呟いた智明の声は、望には届かなかった。

智明はもう一度、敦と顔を見合わせた。

「お前・・・」

智明が重い口を開く。苦悶の表情で望を見ていた。

「大輝が好きなのか？」

智明の言葉に、望は目を見開いた。その考えは望の中では一切なかったことだ。

「お友達って意味じゃねーぞ」

横から敦が言葉を付け足した。

「同性同士つてのは、まずそこに嫌悪感を持つかどうかが重要なんだ。もしそういった感情がなければ十分恋愛は成立すると俺は思うね。池戸が今嫌悪感を朝倉に対して持つていないのであれば、後は朝倉を恋愛の対象として見れるかどうかってことだな」

「そんな・・・急に言われても、大輝は俺にとつてダチで・・・」

「朝倉が告った以上、恋人か赤の他人か、それをお前が選ぶんだよ」

「おいっ！」

敦の言葉に、智明が叫んだ。乱暴に敦の肩を掴む。

「やめろよ、そういう誘導尋問みたいなのっ」

智明の責める眼差しに、敦はへらりとする。

「悪い悪い、だけど間違つてはないだろう」

言われて、智明は言葉を詰まらせた。確かに、敦の言う事は一番

現状を把握した上での正しい意見なのだろう。だが、それを今の望に平気で言える敦のことが智明には信じられなかった。杓子定規の考えを当てはめるには、人の心は曖昧すぎる。なにより、智明には敦が面白がっているとか見えなかった。それが気に食わなくて、つい敦の意見と対立するような事を口にしてしまう。

「望、焦らなくても、ゆっくり考えればいいさ」

智明は望を慰めるように言った。

「だけど、ちゃんと答えだけは出してやれよ。お前は俺にとって大事なダチだけど、大輝も俺にとっては同じくらい大事なダチなんだ。ちゃんと二人が納得できるような結果を出さないと、絶対後悔すると思うから」

焦らなくてもいい、と智明は重ねて言った。

「あんまりもたもたしてると、どっちに転ぶにしろ修復が不可能になるぞ」

智明の言葉を茶化すように、敦が横槍を入れる。智明はじろりと敦を睨んだ。

「三浦は少し黙ってるよ。急いだってこういうことは仕方ないだろ」「そう言っている間にも、どんどん溝は深くなっていくもんだ。時間が経てば経つほどにな。それこそ十年二十年経てばお友達の関係に戻るかもしれないけど、そこまで気長にはしていられないだろう」

「・・・お前の言う事は極端なんだよ！」

「分りやすいじゃねーか」

「逆に分りにくい！」

「お前が分りたくないだけだろう」

敦がぴしりと言いつつ。

智明は敦を凝視し、その目を陰しくさせていった。

「早瀬は、池戸もだろうけど、三人仲良くお友達でいたいんだよ。今までどおり何の変化もなく、な。それが一番当たり障りのない解決方法だって思ってるんだろ」

敦の言葉に、ピクリと望の肩が揺れる。

「だけどそれってさ、朝倉の気持ちは完全無視だろ。それで友達とか言えるのかよ」

智明は奥歯を噛み締めた。

悔しい。言い返せない自分に智明は苛立っていた。

この男はどうしてこう人の神経を逆なでするような事ばかりを言うのだ。智明は忌々しげに敦を睨みつける。

望は、ゆっくりと頭を上げて敦を見た。すぐに、敦と目が合う。

にやにやとした表情を浮かべていると思っていた望は、真剣な目をした敦を見て息を呑んだ。

敦は、望を見つめたままゆっくりと言った。

「少なくとも、朝倉の中ではもう答えが出ているはずだ」

敦の言葉に、望は怯えたように肩を震わせた。

頭を過ぎるのは、遠ざかっている大気の背中。

声を掛けても、それはどんどん小さくなっていく。

立ち止まってくれない。振り向いてもくれない。

大輝がどんな表情でいるのか、それが分らない。

望うつむいて唇を噛んだ。

ピリツとした痛みが回転の鈍くなっていく思考に刺激を与えていく。

考える、と望は自分に叱咤した。

好きか、と問われれば、分らないと答えるしかない。だけど。

望は自分の中にある唯一確かな思いを、自覚した。記憶の中にある大輝の影に、言った。

なあ、大輝。

俺はお前の背中なんて見たくねーよ。

望と智明が中庭で向かい合っている頃、大輝は一人で廊下を歩いていた。

「朝倉っ」

声がして、大輝は立ち止まる。振り返ると、後ろから剣道部マネージャーの森が走り寄ってくるところだった。大輝の前に立つと、森は大輝よりも頭一つ低い位置で少し乱れた息を整えている。

「森先輩、どうしました？」

「これから昼か？」

「ええ、まあ」

「俺も何だ」

そう言っただけ森は手に持っていた弁当袋を掲げた。

「一人か？」

「・・・まあ」

「珍しいな」

森は周囲を見回して言った。

「いつもつるんでいたのがいただろ。ほら、刃傷沙汰になりかけたっという」

「早瀬、ですか」

「そうそう。あれも凄い奴だよな。噂が俺らの所まで来てるぞ」

森は笑った。以前智明のところに押しかけてきた男がちょうど森とクラスメイトだったのだ。乱闘騒ぎに森も駆けつけていて、一部始終を目撃していた。

「モテるってのは羨ましいけど、俺はどうにも・・・」

そこまでしゃべって、森は大輝に気付いて口を噤んだ。

大輝は森の気遣いに苦笑するしかなかった。

「気にしないでください」と言うと、森は少し安心したように息を吐いた。

「喧嘩か？」

「は？」

「いや、なんとなくさ。最近よく一人でよういようだし、何かあったのかと思ってさ」

「・・・まあ」

大輝は言葉を濁す。簡単に「喧嘩」だと割り切れるような問題ではなかった。むしろ、ただの喧嘩であればどれほど良かったかと思ってしまう。「ごめん」「悪かった」のひと言で以前のように仲の良い友人に戻れるのなら、その方がずっと良い。そうすればまた望の側にいることが出来るのに、とそこまで考えて大輝は自嘲するように口元に笑みを浮かべた。今更言ったところでどうしようもないのだ。絶対に望にだけは伝えてはいけないことを言ってしまったのだから。一応「忘れてくれ」と言っておいたが、それで簡単に忘れられるほど望は割り切った考えをすることは出来ないだろう。簡単に忘れられることも、大輝にとっては嬉しくないことだ。

煮え切らない大輝の受け答えに、森はそれ以上の追求をしなかった。

「飯、一緒にどうだ？」

明るい声で誘ってみれば、大輝は礼儀正しく頷いた。マネーじゃーといったも、森は大輝にとっては先輩だ。先輩からの誘いを断れるほど、運動部の上下関係は気安いものではない。そして、今の大輝には断る理由もなかった。どうせ望達とは一緒に昼を食べることが出来ないのだから。

昼食を用意していない大輝に合わせるように、森も購買へと寄っていく。生徒が群がる購買を遠目に見ながら、森は大輝を待っていた。

大輝は残りが少なくなった商品の中から適当にパンとおにぎりを

選んで買った。

(・・・三浦っ)

群れの中からはい出るときに敦とすれ違った。一瞬、二人の目が合う。だが、大輝はすぐに視線を逸らした。一緒にいれば嫌な感情ばかりがわき出てきて気持ちが悪い。

大輝は急いで、自分を待っている森の元へと駆け寄っていった。

「お待たせしました」と頭を下げる大輝に、森は「早く行こう」と急かした。空腹を抱えたままで立ち話はしたくないということだろう。

敦の視線を感じながらも、大輝はその視線を無視して森の後へと続いていった。

森が食事をす場所として選んだのは、校舎の一階に置かれた書道教室だった。

そういえば、と大輝は思い出す。森は書道部員でもあったのだ。書道部自体は週に1回程度の活動しかしていないために、部活を掛け持ちすることも容易に出来てしまう。剣道の竹刀も握らない森が何故剣道部に所属しているかと言えば、幼なじみが剣道部に所属しているからだとい前聞いたことがあった。現在剣道部部长をしている幼なじみに巻き込まれる形で、入学時から森は剣道部でマネージャーをしているのだ。

「ほとんどあいつのお守りしかしてないけどな」とよく森は笑ってそう言っていた。剣道をしてみたらどうかと誘われても「俺は運痴だから」と絶対に竹刀を握ろうとはしない。それでもマネージャーとしての仕事は忠実にこなしてくれるので、剣道部員達は皆森の存在を重宝していた。

「今日は部長はいないんですね」

思い出したように、大輝は前に机をはさんで向かいに座る森を見ていった。

「ああ、今宮内先生と打合せ中なんだ」

宮内とは剣道部の顧問をしている社会科の教員だ。

「来週からやる武道館の工事のことですか？」

「そうそう。練習メニューとか考えないといけないからな」

森は口に放り込んだゆで卵を頬張りながら言った。

「工事は三週間だつて聞いているけど、その間武道館は全く使えないだろ。基礎練習とか自主練が主になってくるんだろうけど、身体をなまらせるわけにはいかないってずいぶん悩んでたな」

「何処か道場とか借りれると良いですね」

「そうだ！」

思い出したように森が叫ぶ。

大輝を見て嬉しそうに笑った。

「近くの公民館を借りれるらしいぞ。ダンスなんかもやってるらしくて、板張りの広い部屋があるんだってさ」

「そうですか。よかったです」

「まあな。でも、毎日って訳にはいかないみたいで、週に3日程度がいいところうって言ってた」

「それでも十分ですよ」

「だな。さすがに教室内で竹刀を振り回すわけにはいかないしな。外っていうのも毎日になると嫌になるし」

「そうですね」

「柔道部なんかはこの1階の西にある空き教室があるだろ、そこを使っただって言ってた。畳引けばどこでもできるからって」

「畳は持ち運べるやつですからね」

大輝の受け答えに、森は頷く。

「今回の工事に合わせてその畳も作り替えるんだってさ。いいよなー、俺らのところの板張りも新しくして欲しいよ」

森がぼやく。

「工事って言っても耐震補強だもんな。少しはリフォームもしてくれるらしいけど、確か・・・部室は綺麗にしてくれるとかいってたな。あとシャワー室も」

森は嬉しそうに言う。

「狭いのは変わらないんでしょうね」

「まあ、それは仕方ないんだろうな」

大輝と森は目を合わせて苦笑した。

「そつえばさ、柔道部で思い出した」

食べ終えた弁当箱を片付けながら、森は大輝を見た。

「お前さ、岡田と何かあったか？」

突然上げられた聞き覚えのある名前に、大輝は驚いたように森を見る。

落ち着けと自分に言い聞かせる。

頭の中には、望の首を絞める岡田の姿が蘇る。ざわりと、血が騒いだ。目の奥が熱くなり、あの時の怒りが蘇ってくる。それを悟られないようにと、大輝は静かに息を深く吸い込んだ。

森は、様子の変わった大輝に気付いて「やっぱりそうか」と心の中で頷く。

「何かって、何ですか？」そう言った大輝に、森はやれやれといった様子で肩をすくめた。努めて普段と変わらぬ口調で言葉を続けていく。

「それを俺が聞いてるんだよ」

押し黙ってしまった大輝の前に、森がどうしたものかと思案した。「俺が何か聞いたわけじゃないけど、柔道部の部長から相談を受けたんだ。どうにも岡田の様子が最近おかしいんだってさ。お前の方をちらちら見てはこう・・・思い詰めているって感じの顔をしたりしてさ。向こうはもうすぐ北高との練習試合を控えてるだろ。北高はうちよりも成績が良いから、練習試合でも勝てると箔が付くっていかさ、とにかく気合いが入ってるんだよ。それなのに岡田の調子は下降気味らしい。岡田は柔道部の大将だからな。あいつがけると全体が共倒れになるんじゃないかって部長が心配してるんだってさ」

話自体は森も又聞きのように、噂話のように大輝に話した。

大輝は、最後に見た岡田の顔を思い出していた。岡田は憎しみの籠もった目を望に向けていた。だが、岡田は決して馬鹿ではない。大輝はそう思っていた。時間を空けて冷静になれば、自分の愚かな行動にも気付くはずだ。智明のことにも自分なりに折り合いを付けられるだろう。ただ、それにはまだもう少しの時間が必要だということだ。

「俺が直接関係しているわけではないです」

「少なからず何かはあったわけだ」

「まあ、・・・揉めたのは早瀬とですから。そこら変で少し飛び火はしました」

「・・・また早瀬か」

森が顔をしかめた。大輝が苦笑する。

「すみません」と謝ると、森は慌てたように大輝の頭を上げさせた。

「原因は何なんだ？ やつぱり、この前みたいなことなのか？」

「俺は当事者じゃないんで」

話すことは出来ないと大輝は首を横に振った。

「今回はどちらが悪いとかそういうものではないんです」

「・・・でもなあ、放っておく訳にもいかないだろ」

「放っておいた方がいいと俺は思います」

むしろ、部外者が手を出す方が事態を悪化させる原因となると大輝は思っている。

「時間が経てば、解決すると思いますから」

何もしないでくれと、大輝は森に目で訴えた。

「・・・わかった」

森は神妙な顔で頷く。

「練習試合までに解決してくれるといいんだけどな」大輝の言葉を受け入れたといえど納得しきれていない様子の森がぼやいた。

「じゃないと、柔道部の部長がいらんお節介を焼きそうだな」

「あの人は割と世話焼きですからね」

「暑苦しいほどに人情家だからな」

森が笑い、大輝もつられたように表情を和らげた。

不思議な感じだと、大輝は思う。

いつもなら隣には望がいて、智明もいる。大輝は二人の話を聞きながら昼休みを過ごすのだ。それが普通で、当たり前前に訪れる日常だと思っていた。

こうして離れてみて、大輝は改めて二人が側にいることが自分の日常の一部となっていてことに気付かされていた。一人になることの方が違和感を感じてしまう。

早くこれになればと思えば思うほど、焦りのような感情が押し寄せてくる。

(・・・望)

大輝は窓の外に目をやった。

きつと、望はいつものように中庭にいるのだろう。智明と二人か、それとも・・・。

大輝の頭の中に敦の顔が浮かび上がる。自分をあざ笑うかのような薄笑いを浮かべている。

突然望の側に近づいて、自分との間に割り込んできた男。大輝は敦の存在が目障りで仕方がなかった。だが、それを主張するには自分の立場が弱すぎる。気持ちを伝えてしまった今は、望の側に射られるかどうか絶望的なのだ。

(今更友だちにも・・・なれないしな)

乾いた笑いが大輝の口から漏れた。自業自得だ。

大輝は握る手に力を込めた。

「おいつ、朝倉！」

突然の森の声に、大輝は我に返る。

見ると、森が慌てたようにポケットからハンカチを取り出ししていた。

「こぼれてる！」

そう叫んだ森の声で、大輝はようやく自分がカミパツクのコーヒ―を握りしめていたことに気がついた。ストローの口からコーヒ―が溢れ出している。

森は大輝の手からコーヒ―のパックを取り上げると、持っていたハンカチでコーヒ―がこぼれた場所を拭いていた。袖口と胸元や膝にこぼれたところもあわただしく拭いていた。

「すみません」

恐縮するように大輝が言う。

森は手を止めて大輝を見上げ、微笑んだ。

「お前でもこういうドジを踏むんだな」

いいながら、森はまた手を動かし始める。その手を大輝が握った。森の手からハンカチを受け取ると、大輝は自分でこぼれたコーヒ―を拭いていった。

その様子を、森は眺めている。

「朝倉はいつもそつなく何でもこなすから、俺らとはできが違うんじゃないかと思っていたけど、人間らしいところもあるんだな。安心した」

「・・・けなされているように聞こえるんですけど」

「誉めてるよ、ちゃんと」

「・・・はあ」

納得できないと言いたげな大輝を見て、森が声を上げて笑った。

その笑顔には邪気がないために、大輝は文句を言うことも出来ずに黙々と森のハンカチで制服を拭いていた。

同じ頃、望は智明と敦を連れ立って中庭から教室に戻るところだった。

敦が近道をしようと言い出して、三人は1階の非常口から校舎へと入り、昇降口を目指して歩いていった。三人とも下靴を手に持って

いるために足音はほとんどなかった。

書道教室の前を通りかかったとき、不意に敦が足を止めた。

「朝倉！」と誰かの叫ぶ声が聞こえて、望と智明も足を止める。

窓硝子から教室の中を覗くと、そこには大輝がいた。目の前には望達に背を向けるようにして座る男子生徒がいた。男子生徒は立ち上がり、大輝に身を寄せていく。

望は息を殺すようにしてその様子を覗いてた。

大輝の手が、その男子生徒の手を掴む。二人は見つめ合うように視線を絡めていた。

（大輝！）

喉から出かかった声を無理やりに押さえつけて、望は唇をかんだ。手に持っていた下靴を握り締める。

そして、全てに背を向けるようにして望は走り出した。

突然の望の逃走に、同じように中を覗いていた智明が声を掛けようと口を開く。だが、それを敦が遮った。智明の肩に手を置いて、その場を離れるように促していく。

智明は書道教室にいる大輝と走り去っていった望の両方を気にするようには視線を左右に振りながらも、敦と共に望の後を追っていた。

昇降口に来て、智明は望がまだここに来ていないことを知る。先に走っていったはずの望の下靴が下駄箱に収められてはいないのだ。代わりに、上靴が綺麗にそろえられて仕舞われている。

「何処いったんだ・・・」

探しに行こうとした智明を、敦が呼び止めた。

「授業が始まれば戻ってくるさ」

呑気に言う敦の声が、智明の苛立ちを煽っていく。

さっさと上履きに履き替えた敦の背中に、智明は冷たい声で言った。

「お前、知ってたのか？」

敦は立ち止まり、ゆっくりと振り返った。へらりと笑う敦の表情からはその裏に隠された思いまでは読み取れない。何を考えているのか、こういう時の敦からは全く知り得ることが出来なかった。それが馬鹿にされているようにも感じてしまい、智明は更に苛立ちを募らせていく。

「何が？」

「とぼけるなよ」

「真面目に聞いているんだけどな」

「なら真面目に答えろ。お前、大輝が書道教室にいること知っていてわざとあそこを通るように仕向けただろ」

智明の強い視線を受けて、敦はにやりとする。

やはり、と智明は確信を持った。だが、敦の返答は智明の期待通りのものではなかった。

「知っていた訳じゃない」

「はあ？嘘付くなっ」

「嘘じゃない。ただ、あそこにいるかもしれないという予想はしていたけどな」

「だからわざと通らせたのか」

「それは偶然だろ」

「お前が非常口から入ろうって言ったんだろっが！」

「それを拒否れば、俺はそれ以上は言おうとは思っていなかった」

敦の言葉に、智明は顔をしかめた。

「無理強いするつもりもなかった。だけど、お前らはすぐに俺の提案に乗ってきた。俺が仕組んだ事じゃない」

「お前がそんな提案をしなければ余計なものを見ずにすんだんだよ！」

「それこそ偶然だ。俺が狙っていた訳じゃない」

敦と智明がにらみ合う。先に力を抜いたのは敦の方だった。

「なあ、こういうのを水掛け論って言うんじゃないのか？」

「・・・お前さ」

智明は未だに敦を睨んだまま、唸るような声を上げる。

「一体何がしたいんだよ」

智明の言葉に、敦は口元に浮かべていた薄ら笑いを消した。

「急に望の側に張り付きだして、大輝を挑発したかと思えば牽制したりして。意味わかんねーよ」

吐き捨てるような智明の言葉に、敦は笑った。その場を取り繕うような調子の良い笑みではなく、智明の初めて見る冷たい笑みだった。高飛車に、人を見下すような目で、敦は智明を見る。だが、その表情もすぐに消えてしまい、残ったのはへらりと笑ういつもの敦だった。

「人にはそれぞれ思うところがあるんだよ」

敦の言葉に、智明は目を見張る。

「お前・・・」

智明は言葉を詰まらせた。「何だ？」と聞き返す敦から目をそらす。

「何でもない」

「そっか。とりあえず、教室に戻らねーか？」

「望は・・・」

「頭が冷えたら戻ってくるって」

「でも」

「今俺らが何かしたって、役には立たねーよ」

敦の言葉に、智明は黙り込んでしまった。確かに、今望を探し出したとしても掛ける言葉は見つからない。望の気持ちがよく分からない今は、アドバイスのしようもないのだ。

「行こう」と言って歩き出した敦を見やり、渋々といった様子で智明は後を付いていった。

（もしかして・・・）

ひっそりと心の中で疑問を繰り返しながら、智明は先を歩く敦の背中を見た。

（三浦って望のことを・・・）

今までの敦の行動を思い返してみながら、智明は考える。

（・・・まさかなー）

自分の考えに智明は苦笑した。

（そうごろごろとホモが転がってるわけないよな）

自分に言い聞かせるように、智明はそう結論づけていった。

特別教室へと続く階段の踊り場。

望は壁に背を付けて座り込んでいた。足下には持ってきた下靴が転がっている。

少し黒ずんだコンクリートの白い壁をぼんやりと眺めていた。

頭の中には先ほど見た大輝と男子学生の姿が浮かんでは消えていく。

望は無言で転がっていた下靴を掴む。徐に手を振り上げると、下靴を壁に投げつけた。バシッ音を立てて下靴は壁に叩きつけられ、床へと落ちていく。

その様子を眺めながら、望は噛み締めていた奥歯に力を込める。

「・・・なんだよ」

呟いた声は、静まり返った踊り場にやけに大きく響いていく。

大輝が誰と一緒にいたのかは知らない。だけど、先ほどの大輝が誰を見ていたのかは分る。それが自分ではなく大輝の前にいた男子学生だということは一目瞭然だった。

「俺が好きなんじゃなかったのかよ」

望はクシャリと顔を歪めた。鼻の奥に刺されたような痛みがあった。

ズズツと音を立てて望は鼻を吸った。

どうにも全てがはつきりとせず、あやふやなままの状態が気持ち悪い。

「もう・・・わけ分んなねー」

望は胸の辺りに手を添えると、制服を握り締めた。その辺りがむかついていて、吐き気がこみ上げてくる。

「どうすりゃいいんだよ」

望は額を折り曲げた肘の上につけた。うずくまるようにして身を縮める。

思い出すのは、視線を合わせようとはしない大輝の姿だけだ。いつから、自分の記憶がそんなものに摩り替わってしまったのか。

このままではいけないと、自分の声が叫んでいる。

自分以外の人を見る大輝を見せつけられたとき、望は息苦しさに眩暈がした。思い出しただけでもその時の苦しさが蘇ってくる。

「このままじゃあ・・・」

望は唇をかんだ。ゆつくりと頭を上げると、離れた場所に自分の下靴が片方転がっていた。

「・・・大輝のアホっ」

望は自分の膝を抱きこむようにして顔をうずめて呟いた。

一日の学業から開放された生徒たちが、箠を外し騒ぎ出す放課後。家に帰る者や、部活へ向かう者たちはそれぞれ教室を出て行った。智明は帰り支度をしながらこれからの予定を頭の中で反芻していた。夕方、恋人の中の一人と待ち合わせる事になっている。それから彼女の家に言って夕食を作ってもらい、一緒に食べるのだ。その後の展開を思い浮かべて、智明はにんまりとした。

「・・・智明」

背後から声を掛けられて、智明は振り返る。そこには、思いつめた表情の望がいた。

望はまっすぐ智明と視線を合わせようとはしない。彷徨わせた視線は、何かを探すように左右へと振られている。

智明も、望の視線を追うように周囲を見回した。

（大輝の奴は、部活に行ったのか）

目当ての男の姿がないことを確認して、智明は改めて望を見た。

「ちよつと、・・・話があるんだけど」

望はぼそぼそと言った。自分の言葉に自信がないように、もじもじと指先を弄んでいる。

智明はやれやれといった様子で深く息を吐き出した。

ここ数日、望は日増しに元気を失っているようだった。

それというもの、大輝がことごとく望を避けるようにしているからだ。

大輝が避けようとする理由は、智明にもいい加減分っていた。分らざるを得ない状況になってようやく智明は大輝の性癖に付いてもどうにか受け入れつつあった。大輝からすれば、好きな相手が側にいて、その想いが叶わないと知れば側にいることすら辛いのだろう。それは同じ男としてよく分る心情だ。だが、大輝は気付いていない

のだと智明は思っていた。何とか大輝と話をしようと奮闘している望むの姿は、好きな人を追いかける女性の姿と同じだ。智明にはそうしか見えなかった。

そうになると、二人は相思相愛なのかもしれないと智明は思い始めていたその可能性のほうが高いのだろう。それならば大輝がもう少し積極的に責めていけば望は落ちるだろう。傍から見ていると、お互い遠慮するように離れたり逃げたりしていて、とても歯がゆいのだ。早く結果を出してくれないと自分の立ち位置も微妙なものになっていて、居心地が悪くて仕方がない。

「お前ら、いい加減にしろっ」と怒鳴りたくもなるのだが、憔悴していく望を見ているととても口に出して言うことなど出来なかった。「話って?」

身構える様子を見せないように心がけながら、智明は聞き返した。「ちよつと・・・」と呟いて、望はうつむいてしまふ。そういえば、最近望の顔もあまり見ていなかったことに智明は気が付いた。智明が目を向けていないわけではなく、望がうつむいている事が多いのだ。望らしくない、と思えばこそ、智明は大輝への苛立ちを募らせていた。

「聞きたいことがあるんだけどさ」

「・・・何?」

智明は手に持っていた鞆を机の上に置いた。話を聞く姿勢を見せる。

すぐに帰ろうとしない智明を前に、望は相談できそうな雰囲気を感じ取り少しだけ安堵の表情を浮かべた。

「例えば、さ。・・・例えばだぞっ。好きとかって相手に伝えようとするときって・・・どうしたらいいんだ?」

望の言葉に智明は目を見開いた。目の前で何うように見てくる望を凝視する。

「それって・・・」

「朝倉に告るってことか?」

智明の言葉に重なるように、別の声が聞こえてきた。

見ると、望のすぐ後ろに敦が立っていた。

「お前、どうしていつもこういう時に沸いて出て来るんだよっ」

「人間が湧き出るわけないだろう。ちゃんと歩いて来たぞ」

敦のからかう声に、智明は額をぴくりと震わせる。「そういうことじゃない！」と怒鳴るが、敦は気にする様子は一切なかった。

智明を無視するように、望を見る。

「本気で告白するつもりなのか？」

聞かれた望は、慌てたように頭を振った。

「ちがつ、俺は・・・その、例えばって・・・どうするもんなのか知リたかったというか、その・・・」

次第に声を小さくしながら、望は言い訳のように言う。

「今までそういうことなかったし、したこともないし、だからよく分らなくてさ」

「ないって、朝倉に告白されただろう」

「あっ、あれは！勢いっていうか・・・なんていうか、こう・・・改まってするにはどうするのかなと思ったんだよ。ただ思ったただけだぞ！」

必死に言いつくろう望の前に、智明と敦は顔を見合わせた。

「智明ならそういうこと多いだろうし・・・」

「まあ、確かによくあるけどさ」

智明は謙遜せずに言い切った。「嫌味な奴」と呟く敦をひと睨みしする。だが、敦という男は相手にすればするほど調子に乗るだけだということに智明は最近になってようやく気が付いた。それだけ話す回数がここ最近で増えたという事なのだろう。

智明は睨む以上の反応を見せないように気をつけながら、改めて望に向き合っていく。隣りで茶化すような言葉を挟んでくる敦のことは、意識して無反応を装った。

「で？大輝にどう告白したら良かったってことか？」

「俺！そんな事言っていないだろ！例えばの話だよ。相手だって大

輝とかじゃ・・・ないかもしれないだろ」

はつきりと否定しない時点で肯定しているとられても不思議ではないのだが、そのことを望は気づいていなかった。

「分った分った、例えばってことで、告白の仕方を知りたいってことでいいんだな？」

智明の言葉に、望は頷いた。

「告白・・・ねえ」

智明は思案する。自分の知る告白の殆どは、相手にそれを言わせるように仕掛けていくのであってサプライズな言葉を贈ることも贈られることはあまりなかった。しかも、智明の相手は全てが自活している年上の女性ばかりだ。「あたしが面倒見てあげる」といった保護欲丸出しの告白が多く、望のように純粹に好きという気持ちを伝えるような告白は参考例を挙げることが出来なかった。

「あー・・・俺の場合はあんまり参考にはならないかもな」

智明のぼやきに、敦がけたけたと笑った。「相手がおばさんじゃーな」と茶化す敦の言葉に、智明が喰らい付く。

「おばさんじゃねー！」

「そうかー？年増ってことはおばさんだろ」

「一緒にするな！」

「一緒だろ」

「や・・・やめろって」

遠慮がちにかけられた望の声に、智明と敦は現状を思い出した。

ようやく望の相談に乗っていたことを思い出す。

咳払いを一つして、智明は平常心を取り戻すように「落ち着け」と自分に言い聞かせた。

望の参考になるような事例を自分は持ち合わせてはいない。それでも大切な友人である望の役に立ちたいと思い、智明はありていの言葉を並べていった。参考にするのは時折見るテレビドラマの登場人物たちだ。

「好きだって気持ちを伝えればそれで十分だと思っけどな。好きで

すとか、好きなんだとか、付き合ってくれとか。あまり言葉を飾ったりしないほうが心に来るぞ」

言いながら、こんな事が参考になるのかどうか智明は不安だった。望は考えるように押し黙っている。

「でもさー、インパクトつてのは大事じゃね？」

敦が横槍を入れるように言った。

「インパクト？」

望は興味を持ったようで、敦を見る。

「そうそう、告白と別れは俺らにとって一大イベントだろ。ちゃんと記憶に残るように演出するつてのも大事だと思うぞ」

「例えば？」

「そうだなー」

敦がにやりとする。

徐に腕を伸ばすと、敦は望を抱きしめた。

突然のことに付いていけずに、望も智明も呆然としていた。望に至つては、息をすることも忘れてしまったといった様子で身体を硬直させている。

「俺、お前のことが好きなんだ」

敦は望の耳元で囁いた。

「俺と付き合ってくれ」

望を抱きしめる腕に、力が込められる。

「お前でないと、俺は駄目なんだよ」

敦は熱っぽい声で望の名前を呼んだ。

望の体がピクリと揺れる。敦の胸に顔をつけた状態で、耳を真っ赤に染めていた。

「好きだ、望」

敦は望の首元に顔をうずめていった。

身体を締め付ける腕が、熱い。

望は硬直していた。動けばそれだけ身体を覆う敦からの拘束から

逃れられなくなりそうで怖かった。

「なーんてな」

突然、敦がいつもの調子に戻した声で言った。

ゆつくりと、望を抱きしめる腕から力を抜いていく。まだお互いが触れ合った状態で、敦は望の顔を覗き込んだ。

「本気にしたか？」

敦は意地の悪い笑みを浮かべる。

望は赤かった顔を更に赤く染めて、敦を睨んだ。抗議の言葉をぶつけたいのだが、上手く声が出てくれない。

「まあ、これくらいのインパクトがあっても・・・あっ」

言葉の途中で敦が声を上げる。望の肩に触れていた自分の手を、反射的に退かした。

智明も望も、口を開けたまま正面を見つめている敦の視線を追って振り返った。

「！？・・・大輝っ」

望が叫ぶ。

教室の入り口には、部活に行っただけの大輝が制服姿のままで立っていた。

険しい顔で望と敦とを見比べる。望と視線が合うと、大輝はすぐに目を逸らした。そして踵を返して立ち去ってしまった。

「大輝っ」

望はもう一度大輝の名前を叫んだ。だが、大輝の姿はすぐに消えてしまった。

望は立ち尽くして、大輝のいた入り口を食い入るように見つめていた。

一方の敦は、ばつが悪い取ったように頭を掻きながら、立ち尽くす望を伺うように見る。智明は責めるような視線を敦に送っていた。悪ふざけが過ぎたのだ。智明は余計に現状を悪化させただけの敦に「どうしてくれるんだ!？」と目で訴える。それだけでは怒りが収

まらずに、智明は敦の脛を蹴り上げた。

ようやく望が重い腰を上げたところだというのに、目標物の大輝が逃げ出してはただの空回りで終わってしまう恐れがある。

未だに立ち尽くす望を見て、智明は望の腕を掴んだ。同時に、敦の拳が望の頭に振り下ろされた。

ゴンツという音が立ち、望の頭が揺れる。

そこでようやく望が我に返った。痛む頭を抱えながら、恨めしうに敦を見やる。

敦は惘然とした表情で望を見ていた。その目は、真剣な色を帯びている。

「お前は何をやってんだ」

呆れたというふうに敦が言う。その言葉をそのまま返したいと、智明は心の中で毒づいた。だが、成り行きを見守るように進言はしない。

「朝倉が好きなら追いかけるよ」

敦の言葉に、望の瞳が揺れる。

「好きなんだろう？」

聞かれて、望は唇をかんだ。

「時間が経てば経つほど、誤解は解きにくくなるぞ」

誤解を作った張本人は平然とした様子で偉そうに言い放った。

「でも・・・」

望の足は、地に張り付いたように動かなかった。

「何を言えばいいのか・・・」

分らないのだと望は言う。その言葉に、敦は見せ付けるように大きなため息を落とした。

「くだらない事をぐだぐだと考え込む前に、思ってること全部ぶちまけて来い！」

敦は偉そうに胸を張った。

「あいつはお前よりも頭がいいから、お前の言いたいことをちゃんと汲み取ってくれるさ」

「・・・でも、分つてくれなかったら・・・」

望はこれ以上大輝に背を向けられる事が怖かった。今更自分が何かを言ったところで何が変わるのだろうと思うと、どうしてもしり込みしてしまうのだ。

望の言葉を、敦は鼻で笑う。

「それなら、あいつが分るまで言い続けるよ」
簡単なことだと敦は言う。

「これが最後のチャンスだぞ！」

敦の力強い声に、望ははっと息を呑んだ。

（これが・・・最後）

頭に浮かぶのは、やはり大輝の背中だ。先ほどの姿と重なって、それがどんどん遠くへと離れていつてしまう。

（嫌だ！最後なんて・・・冗談じゃない！）

沸き起こった感情は勇氣に似た、だがそれとは別のものだった。自分の言葉を聞こうともしない大輝への腹立たしさに近いのかもしれない。

その感情が、足踏みしていた望を奮い立たせていく。

望は強い視線で、誰もいない教室の入り口を見据えた。
つい先ほどまで大輝がいたそこを見て、望は拳を握る。

「行つて来い！」

声と同時に、望は敦に背中を叩かれた。

「駄目だったら俺が拾つてやるから」

「・・・それはいい」

「ははっ、ここでそんな憎まれ口利けるなら大丈夫さ」

敦がシニカルな笑みを浮かべる。

敦なりの優しさで自分の背中を押してくれているのだろう。望は敦を、そして智明を見て、大きく頷くと走り出した。

望の走る足音が、次第に遠ざかり消えていく。

敦と智明、二人が残された教室には、奇妙な静寂が生まれていた。

二人は無言で望の出で行った入り口を見ていた。

「どうなるのかな」

ぽつりと、智明が言った。敦に対しての言葉ではない。だが、側にいた敦は智明に答えるように静かに言った。

「さあな」

「上手くいくと思うか？」

「いずれはくつつくだろうさ」

今でなくても、それは必ず訪れるであろう近い未来。敦は確信を持って言い切った。

「だがまあ、朝倉はあれで結構腑抜けだからな。時間はかかるかな」

「ははっ、言ってる」

智明と敦は視線を交わして笑いあった。

「付き合いだすまでにどれくらいだろうな。来月・・・まあ、ひと月は現状維持が妥当なところじゃないかな」

「そうか？俺はもっと早いと思うけどな。結構とんとん拍子に話が進むかもしれないし」

「それはないって」

「いやいや、大輝だってやるときはやるぞ」

「池戸に関してはどうかー」

言い合った末に、二人は言葉を切ると無言でにらみ合った。

「賭けるか？」

「にやりとして敦が言う。」

「望むところだ」

智明が鼻を鳴らす。

「ひと月以内にくつつく方にビックマックセットだ」

自信満々といった様子で智明が言った。釣られるように敦が口を開く。

「じゃあ俺は、一ヶ月は進展なしにレッドホットツイスターセットだ」

「ケンタッキーの？奮発するなー」

智明は感心するように言った。たかが40円の差額なのだが、高校生にしてみれば手痛い出費という事なのだろう。

「それでもあの二人がくつつくつていう意見は変わらないってことか」

智明の言葉に敦が笑う。

「池戸の様子を見ていたら、そうならないと思うほうが無理だろう」

「だよなー、どう見たって恋する乙女って感じたもんな」

「気付いていないのは当事者だけってな」

「さつさと大輝に教えてやれば早期解決しそうなんだよなー」

「余計な手出しは無用だぞ」

釘を刺すように敦が言う。智明は大きく頷いた。

「お互いにな」

智明はちらりと敦を見る。

「それはそうと、お前はいいのかよ」

智明の言葉に、ようやくといった様に敦が顔を向けてきた。

「何がだ？」

「望のことだよ。お前、好きなんだろう？」

智明は探るような視線を敦に向ける。敦は目を細めた。

「ああ、友人としてな」

静かに言われたその言葉に、智明は「へえ」と中途半端な返事を返す。

「そんなことより、お前、もしあの二人がうまいことくつついた時どうするんだ？」

「どうって、何がだよ」

智明は顔をしかめる。自分が未だにゲイに対しての偏見を拭えずに差別を擦るのではないかと敦が思っているのだと智明は感じた。それが自分への評価の低さに思えて、心外だと憤慨する。

「俺はどんなことがあってもあいつらのダチでいるつもりだ」

見縊るな、と智明は敦を睨んだ。

「そうじゃなくて、ラブラブカップルになった二人とこれから一緒に飯を食うつもりなのかって聞いたんだよ」

「飯？」

何故そこで食事の話が出るのだと、智明は首を傾けた。だが、ここまで来ると敦がまったく関係のない意味不明な言動をするような男ではないという事が分っているだけに、智明は敦の言葉を真剣に考えてみた。

想像してみる。明日、晴れてカップルとなった二人が並んだ場面を智明は頭の中に思い描いた。大輝がどう変わるのかは想像できなかったが、望は180度態度を変えるだろうことは容易に想像できた。嬉しくて、恥ずかしくて、照れくさくて、それでいて横にいる大輝が好きだと全身で訴えるような目をしているはずだ。まともに恋などしたことがないであろう望は、きっと大輝との恋におぼれていく事だろう。大輝は随分と前から望のことが好きだったはずだ。それならば、望のそんな姿は男としては嬉しいはずだ。

そこまで考えが行き着くと、同時に智明は頭の中に重い鉛を詰め込まれたような疲労感を感じた。

「・・・マジかよ」

ややあと、掠れた声で呟くと、智明は頭を抱えた。

友人がゲイであろうがなかるうが、智明にとっては友人以外には成りえない。そう割り切れたはずだったが、現実問題、目の前で男二人にいちやつかれたとき自分は平常心を保てるだろうかと思いついてしまう。二人のそういった姿を想像しただけで疲れが3倍増しになるのだ。

「・・・無理かも」

つい、智明の口から弱音が吐き出された。先ほどの決意などかけらほどしか残っていたに。そのかけらも、少し風が吹けば飛んでしまう程度だった。

苦悩する智明の姿を見ていた敦は、けたけたと声を立てて笑った。「面白くなりそうだし、俺もこれからはお前らのところに割り込も

うかな」

敦の言葉に、智明は顔を歪めた。

敦が側にいると、多分大輝はいい顔をしないだろう。すでに敵と定めている感じがしてならない。望を間に火花を散らすといった構図が大輝の中では出来上がっているようだった。もしかしたら間男のような存在として敦の事を認識している可能性もある。敦は当然、それを利用して遊ぶうとするはずだ。平穏な学校生活を送る為には余計な争いごとを持ち込む敦は側にいないほうがいいだろう。かといって、望と大輝がいちゃつく姿を一人で見るのは精神的にあまりにも負担が大きすぎる。

智明はどちらを選ぶ事も出来なかった。

「よろしくな」と勝手に仲間入り宣言をした敦を前に、智明は激しく悶絶していた。

教室を出て、望は走り続けていた。

剣道部のグラウンドである武闘館は立ち入り禁止の札が立っている。そういえば工事が始まるのだという事を思い出したて、望はすぐに昇降口へと向かった。だが、大樹の下駄箱には上靴しか入っていなかった。周囲に大樹らしき男はいない。望はどうしてすぐに追わなかったのかと、激しい後悔に襲われていた。校舎内で捕まえることが出来れば、話すことも出来たかもしれないのだ。

（いや、まだ・・・きつと間に合う）

望は急いで靴を履き替えた。

大樹は望と同じ電車通学だ。家の方向は正反対だが、学校を出て乗る駅は同じはずだった。大樹が学校を出てまだそれほど時間は経っていない。もしかしたら駅で捕まえることが出来るかもしれないというわずかな希望に、望は掛けてみた。

ふと、教室に置きっぱなしにしてきた自分の鞆のことを思い出した。だが、教室に戻っている時間はない。制服のポケットには携帯と財布が入っている。とりあえずはこれだけあれば十分だった。鞆は、智明が気を利かせて保管してくれるだろう。

望は勢いよく、学校を飛び出していった。

100メートルも走ると、望の息が上がってきた。進むごとに足が重く感じてくる。

上手く呼吸がしにくくなり息苦しさに弱音を吐きたくなってきた。そんな自分を叱咤しながら、望は走り続けていく。

頼むから、間に合ってくれ！

望は天に祈っていた。

宗教とか神とか、そんなものを信じているわけではない。ただ、どうしても願わずにはいらなかったのだ。

ようやく駅の外観が望の視界に映り、望はもう少しだと自分の身体に言い聞かせた。この足を止めたらどれだけ楽だろうか。誘惑が望を誘う。それを振り切るように、望はラストスパートをかけていった。

同じ頃、駅構内では改札口を前に大樹が後ろを振り返った。

構内は帰宅する学生の姿もちろはらと見受けられた。横を通り過ぎていく人たちの頭を通り越して、大輝は駅の外へと続く出入り口を見た。

頭の中で思い描く人の姿は、何処にもない。自分を追ってくるはずがない。そう自分に言い聞かせて、大輝は目を細めた。

大樹は望の顔を思い出していた。戸惑ったように見てくる視線が、苛立ちを生んでいく。望のすぐ側に立つ敦と、望の肩に置かれた手。敦の腕の中にいた望。

(・・・くそっ)

大輝は顔を歪める。

未練がましいにも程がある。大輝は自分自身をあざ笑った。望のことは諦めると決めたばかりなのだ。その矢先に望と敦が一緒にいる姿を見て、簡単に嫉妬してしまう。出来る事ならばあの場から望を奪ってしまいたかった。だが、それをしたところで望が自分と同じ感情を向けてくれる事はない。頭ではそれが分っているのだ。だが、心がついてこない。結局あの場所から逃げるように帰ってきてしまった自分を弱虫と罵るしか今の望には出来なかった。

小さくため息を落とし、大輝は改札口に向き直った。視線を上へ

と向ける。そこに掲げられた電照掲示板には、大樹が乗る予定の電車の発車時刻が映し出されていた。

次の電車が来るまであと10分と少し。

大輝は鞆からポケットからカードケースを取り出すと改札口に向かって歩き出した。

大輝は駅員の待機する一番端の改札口に向かう。

手に持ったカードケースには、定期券が収められている。改札口の手前で大輝はその定期券を駅員に見せるように掲げた。小さく駅員が会釈をするのを確認して、歩き出す。

すぐにカードケースをしまおうと大輝は手を下ろした。

その腕を、突然につかまれて大輝は歩く足を止めた。

振り返ると、そこには肩で苦しそうに息をしている望がいた。

「・・・望」

望は酸素を求めるように激しい呼吸を繰り返していく。肉眼で確認できるほどに、望の額は汗で濡れていた。

「ハア、ハア、・・・やっと、追いついた」

途切れ途切れに望は言った。

大きく息を吸い込むと、まだ呼吸が荒いのだがそれでも望は背筋を伸ばして大輝の前に立った。

「ちよっと、話があるんだけど」

そう言い出した望から、大輝は視線を逸らす。目線の先に、望につかまれた自分の腕があった。その箇所が、熱い。時間と共に熱を持っていくその箇所が、大輝の理性を焼いていく。

「通るの？通らないなら道空けてもらわないと」

そう遠慮がちに駅員に言われて、望は慌ててズボンのポケットから財布を取り出した。その中に挟んでいた定期券を駅員に見せる。

この場所にとどまることは出来ないだろうと、望は大輝を引っ張って改札口を抜けていった。

駅は、改札口を抜けると上り線と下り線とで左右に道が分かれている。ホームに立つと、この上下線は線路を挟んで向かい合わせとなっている。

望はその分かれ道の前で足を止めた。

大輝の腕を掴んでいた手をゆっくりと離すと、改めて大輝と向き合った。

さて、どんな言葉から切り出せばいいのか。望は未だに悩んでいた。

思っていることを全部吐き出してこいと敦には言われているが、それを言葉で表現する事が上手く出来そうにない。

これ以上大輝との距離を開けたくないと思っている望は、言葉選びも慎重になっていた。それ故に、最初の言葉がどうしても出てこなかった。

「三浦はいいのか？」

ボソリと大輝が言った。

「え？」

「随分仲が良いんだな」

知らなかった、と大輝は言う。大輝自身、捻くれた物言いだとは分っていた。だが、どうしても口について考えるよりも先に言葉が出てきてしまう。敦のにやつく顔が頭を過ぎり、大輝は加速的に機嫌を悪くしていった。

「あいつならお前でも付き合えるのか」

「なっ！？違う！あれは、そんなんじゃないって・・・」

「別に、俺に言い訳なんてする必要はないだろう」

「大輝！」

「お前が誰を好きになろうが俺には関係ないんだし」

「ちよっ・・・なんだよ、それっ」

「良かったじゃないか、彼氏が出来て」

大輝は鼻を鳴らして笑った。

違う、こんなことが言いたいんじゃない。

大輝は自分の言葉をスピーカーから流れてくる音のように感じていた。

目の前で顔色を悪くしていく望を見て、息苦しくなる。

「俺のことは気にせず仲良くやれよ」

冗談じゃないっ、と思いながらも、大輝は正反対の事を言っていた。

「お前・・・話を聞けよ！」

望が叫ぶ。呼吸を荒くしながら、大輝を睨み上げた。

望の目は、怒りのためか赤くなっている。

「あれはそんなんじゃないんだ！三浦が調子に乗ってて、俺はそんなつもりもったくないし、冗談というか」

「冗談であそこまでするかよ」

「だからっ！会話の流れでああなったのであってだな」

「どんな流れだよ」

信じられないと言った様子で大輝が言った。

望は言葉を詰まらせる。

まさか、告白の仕方を教わっていたとはとてもじゃないが言えなかった。しかも、望が告白をしようかと思いついていた相手は大輝なのだ。言えるわけがない。

黙りこんでしまった望を見下ろしながら、大輝は悲壮感を募らせていった。

早くこの場から立ち去りたい。そうしなければ自分を保つ事が出来そうになかった。

できることならば、力づくで望を腕の中に閉じ込めたい。無理やりにも自分のものにしてしまいたい。大気は荒れ狂う感情からめを逸らす事に必死だった。

「望、変に気を使わなくてもいい」

静かに、僅かに残った理性を総動員して大輝は冷静さを取り戻す。
「ちゃんと・・・分ってるから」

望は大輝の気持ちに答えることはない。普通の人ならば、同性からの告白を受け入れるだけの寛容さは持ち合わせていない。そして、望は自分とは違い普通の恋愛感を持っているのだ。この気持ちを受け入れてもらえるはずはない、と大輝は思っていた。

「大輝、・・・だから、俺は・・・」

「もういい」

大輝の言い放った一言に、望は目を丸くする。

「もういいんだ。お前は友人だった俺を失うのが怖いんだろ。嫌なんだろう。だからこんなふうに追ってくるんだ」

それくらい分っている、と大輝は態度で示した。だから、これ以上期待させないでくれと願う。追いかけてこられると、勘違いをしてしまう。都合の良い方へと考えてしまいたくなる。それが後、更に自分を傷つけ追い詰めてしまっただろうことを考えると、大輝は恐ろしかった。

大輝は逃げるように望から視線を逸らす。

「俺も、すぐには無理だろうけど前みたいな友人としての関係に戻るように努力する。だから、少しの間俺のことは放っておいてくれ。時間が欲しいんだ」

望を諦める時間がなければ、自分はきっと暴走してしまう。こうして手の届く距離に望がいると、どうしても気持ちが高ぶってしまうのだ。自分が何をしでかすのか分らない事が、大輝には恐ろしかった。

「じゃあな」

大輝は望に背中を向ける。

望が何かを言う前に、足早に歩き出した。望の来ない上り線のホームに向かっていった。

これでいい。

振り返りたい衝動を必死で押さえ込み、大輝は足を止めることなく歩き続けた。

階段を上っていく。

一人の時間を持てば、この気持ちを忘れる事が出来るかもしれない。そうすれば、また以前のように望の側にいられるようになるのかもしれない。

それだけが、大輝にとっての希望だった。

取り残された望は、ただじっと、その場に立ち尽くしていた。固く握り締められた拳が、感情の高ぶりによって震えている。

(・・・こそ！)

望は大輝が歩いていった先を睨む。すでに大輝の姿は何処にもない。

徐に振り上げられた望の拳が、近くにあつたコンクリートの壁に叩きつけられた。

「ふざけんなっ」

周囲の目も何もかも、望の意識の中からは除外されていた。あるのはただ一つ、大輝が向かつていた先に続く道だけだ。

『上り線、間もなく発射いたします』

駅員のアナウンスが、駅のホームに響き渡る。殆どに乗客がすでに電車に乗っていた。ホームに立つ人影は、駅員のものだけだ。

大輝は電車に乗り込んですぐの場所に立っていた。ぼんやりと、車内に張られた広告を眺めていく。だが、そこに書かれた文字も絵も、なにも頭の中には入ってこなかった。

駅員の吹く笛の音と共に、電車のドアがゆっくりと閉まっていく。これで、終わりだ。大輝は閉まったドアを見ながら思っていた。

このドアが、大輝と望とを隔てる壁のように思えて仕様がなない。

一人、落ち着いて考えてみればみるほどに、大輝は昔のように友達として望の側にいられるようになるとは思えなかった。友達のふ

りを続けていく事も出来ないだろう。それほどまでに望の事を好きになっていた事に、大輝自身を多少の驚きを感じていた。

過去、これほどまでに誰かを思ったことなどなかったのかもしれない。不毛な片思いはいくつもしてきた。友人であった男を好きになった事もあった。だが、自分の感情は常に隠し続けてこられたのだ。今でも友人として彼らと接することはできる。

（・・・なんで望なんだよ）

望を好きにならなければ、今も望の側にいられたのに。

その思い自体が望を好きだという証拠なのだ。ただの友人ならば、側にいたいとこれほどまでに強く願う事はないだろう。好きだからこそ、誰よりも近い場所で、触れられる距離にいたいと思ってしまうのだ。この想いが望を傷つけることになるだろうことは最初から予想できていた。本当は、それだけはしたくなかったのだ。離れたくなくて、傷つけたくなくて、頑なに自分の想いを隠し続けてきたというのに、そうやって築いてきた友人という立場がいまや瓦礫のように崩れ去っている。

自分はどうすればよかったのか。大輝は誰にともなく問いかけていた。

（こんなにも好きになるとは思わなかった）

大輝は自嘲気味に笑った。

（こんなはずじゃなかったんだ）

過去と同じように、ただ見ているだけで終わるはずの恋だったのだ。

（俺は・・・ただ）

「大輝」

（そう呼んでももらえるだけで嬉しかったんだけどな）

「おいっ」

（側にいられるだけでいいと思っていたはずなのに、いつの間にか足りなくなつて、もっと欲しくなつて・・・）

「大輝！」

突然腕を捕まれて、大輝は我に返った。名前を呼ばれたことにようやく気付いて振り返ると、そこには望がいた。睨み上げてくる視線がすぐ近くにあり、大輝の胸を締め付けていく。

「・・・なんで」

大輝は動揺を隠せずにいた。見開いた目で望を食い入るように見つめる。

電車はすでに動き出し、窓の外に見える風景はスピードを上げて横へと流れている。下り線に乗らないと家に帰れない望が、上り線の電車に乗っているはずはないのだ。大輝は駅構内で望と別れたのだ。いるはずのない望を前に、大輝は呆然としていた。

「俺はお前に話があつたんだよ。それなのに勝手に帰られたら学校からわざわざ追いかけてきた俺の苦労の意味がなくなるだろうがつ」

不機嫌そうに望が言った。

とりあえず逃げようとしないう大輝を確認して、望は大輝の腕を掴んでいた手をゆっくりと離していった。

「俺さ」

望が口を開く。

「いろいろ考えたんだけどさ」

望の言葉が続いていくたびに、大輝の頭の中は冷水を浴びたように冷たく冷め、不思議なほど冷静になって言った。

最後の審判が下される。

大輝はごくりと唾を飲み込んだ。望の口からはつきりとした回答を今まで聞いてきたわけではない。意図的に大輝はそれを避けていた。うやむやのまま自分から区切りをつければ、これ以上傷つかずに済むと心のどこかで思っていたからだろう。

緊張のためか、大輝の喉が渴いてきた。身体は硬直し、手は汗ばんでいる。

それ以上は言わないでくれ！そう心の中で叫びながらも、大輝は無言で望の言葉を聞いていた。

「これでもかなり悩んだんだ。正直どうすりゃいいのかさっぱり分らなくてさ。俺は・・・こういうことには慣れてないんだよっ」

「・・・」

「それで、結論から言つとだな」

望の目が泳いだ。次に続く言葉を言つ事をためらっているように大輝には見えた。

やはり、ここで引導が渡されるのだろう。二度と近づくなといわれるのだろうか、それとも異常だ変態だと罵られるのだろうか。

（別にいいさ。どうせもう側にはいられないんだ）

大輝はそう思うと心が少しだけ落ち着いてきた。

（どうせ側にいられないなら、一回くらい押し倒しておけばよかった）

そんなふう到大輝が考えを巡らせていることなど望はまったく知らない。今は自分のことだけで精一杯で、大輝の顔を正面からまっすぐ見ることにすら出来ていなかった。

望は、自分を奮い立たせるように大きく息を吸い込んだ。

「俺は・・・」

望は勇気を振り絞って大輝を見た。視線が合う。大輝の瞳に自分の影が揺れ、それを見つけたとき無性に喜びがこみ上げてきた。大輝が自分を見ている。そう思うと重苦しかった心が少しずつ軽くなつていった。

（・・・やっぱ俺は）

「お前と離れるのは嫌だ」

きつぱりと、望が言い切った。自分の言葉を反芻して、言えたことに満足するように方から力を少しだけ抜く。

「三浦に言われたんだ。こうなった以上、前みたいなただのダチっていう関係には戻れないって。それならさ、俺は他の方法を考える。その・・・付き合う、とか・・・さ」

望の言葉に、しばし大輝は声を失った。

今、望は何といった？記憶の中に残る望の言葉を思い返し、大輝

は表情を曇らせた。

「・・・本気で言っているのか？」

「おう」

「望は分つてない」

ため息と一緒に吐き出された大輝の言葉に、望は反射的に噛み付いてきた。

「なっ、何だよそれ！」

「俺はこういう冗談は嫌いだ」

「冗談じゃない！俺は真剣に考えて、そう思っただんだ！」

望の言葉に、大輝は疑いの目を向けた。

「何も知らないからそんな事がいえるんだ。付き合うつてことがど
ういうことなのか、本当に分ってるのか？俺はお前が好きなんだぞ」
「うお！？お前っ、そんなことをはつきり言っなよ！」

望の顔が、恥ずかしさでほんのりと赤みを帯びていった。その表情が可愛いと、大輝の目には映っていた。

触れたい。その衝動に駆られるように大輝の指先が震えた。だが、
どうにかして自分の欲を押さえつけながら、大輝は絞るように声を
出した。

「俺は、ガキじゃない。お手で繋いで散歩するだけで満足できるほ
ど聖人じゃない。望に触りたいし、キスしたい」

大輝はいつそう声を低くして言った。

「SEXだってしたい」

「っ！？」

望は金魚のように口を開閉しながら大輝を見た。みるみるまに赤
く染まっていく望の顔を見て、大輝は耐え切れないといった様子で
視線を逸らした。

「望は・・・望の気持ちは俺とは違うだろ」

言われて、望はうつむいた。

大輝が離れていくという事にばかり意識が向き、肝心な事を見落
としていたという事に今になって気が付いた。ここにきてようやく、

望は大輝の気持ちに付いて考えてみる。「好きだ」とは言われたが、具体的にどうしたいのかが今までではさっぱり分らなかったのだ。男同士なのだから、友達という関係とどう違うのかも想像すら出来なかった。女の子とすら付き合ったことのない望にとっては、未知の世界といつてもいいくらいだ。

「・・・分らない」

表情を固くしたまま望は小さく言った。

「大輝の気持ちと俺の気持ちが同じなのか違うのか・・・分らない。どうやって比べればいいのかも分らないし、俺の気持ちとかつてのもしまいち分らないというか・・・だけど！これだけはいえるぞっ。俺はお前が離れていくのが嫌なんだよ！」

子供が駄々をこねるように望は言った。それだけは絶対に嫌なのだと、目に強い意志を込める。だがそれも、すぐに萎んでいつてしまった。

「頼むから、離れていくなよ。今までみたいにさ、一緒にいたいんだよ。ちゃんと考えるから。お前の気持ちとか俺の気持ちとか、ちゃんと考えるから、だからもう少し時間が・・・欲しいんだ」

望はすぐるような視線を大輝に向ける。遠慮がちに、大輝の制服の袖を握った。

（・・・なんでこんな事になったんだ）

大輝は眩暈を感じていた。

目の前には捨てられた子犬のような目をした望が自分を見上げている。それだけでも理性が崩れてしまいかもしれないという危険な状態な上に、あろうことか望が自分の袖を掴んできた。僅かに感じる望の体温に、大輝の中の血液は一気に温度を上げていった。

ようやく望みのない恋から開放されるかもしれないと思ったのだ。少なくとも望を傷つけずに済みそうだと安堵していたのだ。惚れた男が側にいて何も出来ないという生き地獄のような日々が終わると思っていたのだ。それなのに、自分がたどり着いた場所はどうかやら

地獄の入り口だったらしい。

そう分っているのなら今望を突き放せばいい、と心の奥で自分が叫ぶ。

だが、惚れた弱みなのか、すがってくる望を突き放す事など大輝には到底出来る事ではなかった。

最後の足掻きとでも言うように、大輝は聞いた。

「時間ってどれくらいだ？」

「えっと、・・・一年、とか？」

「・・・」

望の遠慮がちな答えに、大輝は眉間にくつきりと皺を寄せる。望は慌てたように言葉を付け足した。

「なるべく早く！・・・頑張るから」

何をどう頑張っていこうとしているのか大輝には理解できない。

望自身もこれからどうして行けばいいのかがさっぱり分らなかった。だが、今この手を離さないで済むならばどんな事でもしてやる、という意気込みだけはあった。

神妙な顔で望は大輝の返事を待った。大輝の眉間に作られた縦皺は今もくつきりとその存在を主張している。望は不安で押しつぶされそうな心持を抱えたまま、大輝を見つめていた。

大輝は、少しの間望を見つめ、そして深くため息を落とした。

好きな相手にすぎるように見つめられて、どうして突き放す事が出来るだろうか。そうできたのなら、きつと自分は新しいスタート地点に立てるかもしれない。だが、望を傷つけてまでその地点に立ちたいと思いつけることが大輝には出来なかった。

「・・・分った」

苦渋の決断といった様子で大輝は頷いた。

途端に望の表情が、まるで花を咲かせたように明るいのへと変わっていった。その笑顔に、大輝は今日何度目かの眩暈を感じていた。

これから先もまたこの無防備な笑顔を前に指をくわえていなければ

ばならない日々が続くのかと思うと、大輝は選択を早まったのではないかと疑ってしまう。

「なるべく望が答えを出してくれるまで、俺は待つ。だけど、どうなるか知らんぞ。俺の我慢はすでに限界なんだ。もしかしたら俺は、お前を傷つけるようなことをしてしまうかもしれない」

「いいよ」

念押しとばかりに言った大輝の忠告も、あっさりと望は受け入れた。その潔さに大輝は驚いて目を丸くする。やはり望は自分の気持ちを理解しきれていないのだろうと大輝は疑った。その大輝の訝しげな視線を受けて、望は口の端を上げる。

「大輝が何をしたっていいさ。俺を傷つけようと思っですることではないんだろ。俺だって、お前を傷つけたいとは思わないし。それに、俺は嫌だと思うことは黙って受けたりしない。全力で抵抗する。お前を殴つてでも止めてやる。だから、そんなことは気にするな」

望はにんまりとする。

大輝の肩から力が抜けて言った。

「勇ましいな」

感嘆の声を大輝は漏らす。望は嬉しそうに笑った。

「男らしいだろ」

「・・・だな」

（こういう馬鹿みたいにまっすぐなところを好きになったんだ）

大輝は改めて、望を好きだという気持ちと向き合っていた。諦める事など出来ない。望という存在を知ってしまった今、望以外の人を好きになる事など想像する事も出来なかった。それだけ、大輝にとっての望という存在は魅力的過ぎたのだ。

「ってことで、これからよろしくな！」

望は拳を上げて、にやりとした。

大輝も拳を作り、軽く望の拳に当てた。

これからもずっと一緒だ。

二人はあわせた拳に誓いを込める。

望は嬉しそうに笑っている。

大輝はまぶしそうに目を細めると、望の姿を見つめていた。

（・・・ここが電車の中だってことは、完全に忘れているよな）

ようやくといったように思い出した大輝は、ひっそりと心の中で呟いた。

（忘れていたならそのままにしておくか）

周囲の目に気付いてしまったら、望はきつと恥ずかしさで走っている電車から飛び降りようとするほどに動揺することだろう。この穏やかな時間がもう少し続くように、大輝は向けられる好奇心な視線から望を隠すように身体を傾けた。

「あれー、お二人揃って仲良く御登校ってか」

翌日、望が教室に入るとすぐに敦が側によつてきた。にやついた顔で望の横に立つ大輝を見る。

大輝は冷めた表情で敦を見返した。

「違つて、たまたま駅で会ったから一緒に来たんだよっ」
望は耳を少し赤くしていった。

本当は、大輝が来る時間に合わせて駅に行き、大輝が来るまで駅で待っていたのだ。待った時間は5分程度だが、それでも望にとつてはその5分はとても長い時間のように感じていた。それなのに、駅から学校までの時間は意外なほど短いものだった。

「上手くいったみたいだな」

敦に言われて、望はむつとりとした表情を作った。だが作りきれずに口元が緩んでいる。それを見つけて、敦は昨日智明と賭けをした内容を思い出していた。これは危険な匂いがする。敦の頭の中でレッドホットツイスターに羽が生えふらふらと遠くへ飛んでいく様が浮かび上がった。

ここは少し探りを入れてみるか、と敦は気合を入れた。探り出せそうな望に的を絞ると、顔を寄せ、敦は低い声で聞いた。

「で？昨日はあの後どうなったんだ？」

敦の言葉に、望はにへらと顔を崩した。これは完全に自分の負けかと悲壮に暮れそうになっていた敦から、大輝は無言で望を引き離れた。腕をつかまれて引き寄せられた望は、背中が大輝の胸にぶつかった。大輝が腕を放してくれないために、望はそこから動く事が出来なくなってしまう。

大輝は望の腕をしっかりと掴んだまま、敦をにらみつけた。
その視線の強さに、敦は方眉を上げる。大輝の反応が昨日のもの

とさほど変わりのないことに気付くと、敦は軽く口笛を吹いた。気分が高揚してくる。まだ、勝敗は自分にあるのかもしれないと思うと、目の前にはビッグマックセットがちらついて来た。

「進展なしかな？」

敦は大輝を見て言った。大輝が不機嫌そうに眉を寄せるのを見て、敦は確信する。

「仲直りはできたみたいだな」

敦は意地の悪い笑みを浮かべた。

「お蔭様だな」

大輝は冷たい笑みを浮かべて言った。その態度に余裕が感じられて、敦はやはり何かが変化したのだろうという事に気が付いた。それを見定めなければ自分のレッドホットツイスターもビックマックも景気よく智明の腹の中へと消えてしまうのだ。それはあまりにも悔しい。敦は次の言葉を慎重に選んでいく。

「お友達に逆戻りかな？」

茶化すように敦が言った。大輝の出方を注意深く観察する。

大輝は目を細めただけで、何も言わなかった。

「おつはよー。って、何やってんだ？お前ら」

智明騒がしく三人の中に割り込んできた。寄り添うように立っている望と大輝、その正面に立つ敦を見て、智弘は少しだけ表情に陰を含ませた。敦を睨みつける。余計な手出しはしない約束だと、目に抗議の色を含ませた。

敦は智明を見て苦笑する。

「三浦に何か言われたかな？」

智明は望に聞いた。この場にいる四人の中で一番嘘のつけないのが望なのだ。智明の探るような視線には気付いていない望は、のんびりとした表情で首を振った。

「別に何も」

「そっか」

安心したように智明が息をつく。

「そうだっ、俺今日の数学当たるんだよ！望、プリントやってきた
だろ？見せてくれっ」

言いながら智明は望の腕を引っ張っていく。敦に邪魔をされては
自分のビッグマックが危ないのだ。必死に望を敦から引き離しなが
ら、昨日大輝との仲に進展があつたのかどうかを探るための算段を
智明は建てていった。

智明に引っ張られるようにして離れていく望を大輝は黙って見送
った。

そして、敦の視線に気付く。

「なんだ？」

面倒くさそうに大輝は聞いた。何もなければ早く望むの側に行き
たいという態度がありありと出ていた。敦は「正直な奴だ」と心の
中で苦笑う。

「結局のところ、どうなったんだ？」

敦の言葉に、大輝は警戒するように表情を引き締めた。

望がないことで敦も言葉を濁す必要がなくなり、大輝に対して
率直な物言いをするようになっていた。

「くつついたのか？」

「いや」

「ただのお友達ってことか」

先はやはり長いのかも知れない。敦はそう思い、一人ほくそえん
だ。俺の勝ちだ、と離れた場所で望のプリントを複写する智明を見
やる。

ひと月以内に恋人の関係にならなければ、賭けは自分の勝ちなの
だ。そう思ったところで、敦はもう一つの可能性に気が付いた。

「まさか、諦めたなんてことはないよな？」

敦は探るような視線を大輝に向けた。いずれは恋人同士になって
もらわなければ両方負けになるのだ。

「諦められれば楽なんだけどな」

大輝は目に哀愁を込めた。

「それでもまあ、諦める必要はなさそうだな。それが分つただけでも救いかもしれん。気持ちがばれているなら、それはそれで他にやりようがあるしな」

「へえ、結構強気じゃねーか」

「強気にもなるさ。これ以上余計な横槍は入れさせたくないからな」

「おい、一応断っておくけど、俺の今までの言動はだな」
「分ってる」

敦の言葉をさえぎるように大輝が言った。

「暇つぶしに俺たちを茶化していたんだろ」

「まあ、それもある」

「まんまとそれに騙された自分に腹が立つ」

「恋は盲目とはよく言ったもんだな」

「だが、本当にそれだけなのか？」

大輝は敦にきつい視線を向けた。一言一句、僅かな仕草すら見逃さないように注意深く敦を見た。

「それだけだつて。池戸を気に入っているって言ったあれは本気だけどな。あいつの特別にならなつてみたいし」

敦の言葉に、大輝の目は陰しさを増していった。

その様子を悠然と見ていた敦は、臆することはない。

「友達として、な」

敦がにやりとした。

これだから、この三浦敦という男は曲者なのだ。決して自分の本心を見せようとはしない、どれだけ探りを入れてもいつの間にか交わされている。その反対に、敦は他人の心を手のひらで転がすようにやすやすと把握してしまう。

これ以上付け込まれる隙は作れないと、大輝は敦に対する警戒を強めていった。いくら否定したところで、敦の望に対する感情を恋愛ではないと決め付けるには疑わしい点も残っている。ただの傍観

者がトンビへと豹変しないと限らないのだ。

「そう警戒するなって。俺はお前を応援してるんだから」
へらりとして敦は言った。

「といつても、事を急いで仕損じてもいかんぞ。必ず池戸を落とすためにはここは少し慎重にだな、ゆつくりと時間をかけてじっくりと責めないとな」

「・・・急ぐとなにか都合が悪いのか？」

大輝の言葉に、敦が目を泳がせた。たった1秒程度の変化だったのだが、大輝はそれを見逃さなかった。始めてみる敦の動揺に、大輝は気分をよくしていった。

「どうせお前ら、賭けでもしているんだろう」

「なんでそれを！？まさか、早瀬が喋ったのか？」

敦は声を潜めていった。離れた場所では智明は必死になって机にかじりついている。

お互いに手出しはしないという約束を交わしたばかりなのに先手を打ってきたという事に敦は腹立たしさを感じていた。今の自分の状況などまるつきり棚に上げていた。

大輝は賭けに参加しているものが智明だと知って、冷たい視線を智明の背中に送っていた。

何やら突然背中に寒気を感じて、智明は身体を震わせる。だが、今は目の前のプリントを片付けなければいけないという思いに駆られて、後ろを振り返る事はしなかった。敦と大輝に睨まれた状況を知らずに済んだことは幸いだったのかもしれない。

「お前と智明が揃うとろくな事がないな」

大輝はやれやれといった様子で呟いた。

ばれてしまったものは仕方がないと、敦は作戦を変更した。大輝が智明から聞いたという事を否定しなかったために、敦は智明が賭けに付いて喋ったのだと思い込んでいる。それならばそれで自分も好きなようにやらせてもらおうと意気込んでいた。

「俺としては、お前ら二人のことは応援してるんだぞ。友人として

二人が幸せになってくれたら良いと思っっているんだ。お前らが喧嘩しているかどうか調子が狂うしな」

「友達として、ねえ」

「勘ぐるな。お前としては面白くない事もあっただろうけど、それはそれで今こうして良い方向に結果が出てるだろ」

恩着せがましい敦の物言いに、大輝は冷たい視線を送った。

「それでなんだが、俺からのアドバイスとしてだな。別に強制をしているわけじゃないぞ。後ひと月くらいは今のあいまいな状態を続けてみてはどうだろうか。ほら、あまりにも早くに事を進めていくとまた池戸がパニックを起こすだろうし、こう、何ていうんだ？友達以上恋人未満って状態は結構楽しいもんだろう。後思い返したときそういう期間があっても良いと俺は思うんだよ」

「・・・なるほどな」

大輝は敦の言わんとしていることを正確に把握していた。

「いつ俺が望を落とすのかを賭けているってわけか」

「だから、勘ぐるな。賭けのことは横においてだな。俺は友人として意見を言ってるんだよ」

「別にここまで来て取り繕うなよ」

大輝の言葉に、敦は一瞬目を丸くした。すぐにいつものしたり顔を作る。

「やっぱり朝倉は話が早いな。ってことで、一つ良しなに頼むよ」

敦がもみ手をしながらひっそりと言う。

なるほど、と大輝は思った。

（誰が見ても落とせる見込みがあるってことか）

大輝は智明がプリントを移し終わるのを静かに待っている望を見た。昨日までは、こうして友人という枠を超える事すら不可能だと思っていたのだ。それが思いがけず超えてしまい、周囲は更に先へと進む事が出来るだろうという見解だ。それならば、いずれは恋人という位置づけになれるのかもしれない。僅かな手ごたえではあったのだが、大輝にしてみてもそれが分っただけでも十分に心が軽く

なるというものだった。

「分った」

大輝の言葉に敦は表情を明るくさせる。上機嫌に数度頷いていた敦を見やり、大輝は不適な笑みを浮かべた。

「三浦が儲けないように気をつけるよ」

「なっ！？何だよ、それ！」

声を張り上げて叫んでしまった敦は、すぐに我に返り身を縮めた。周囲からの注がれる視線よりも、智明の睨みのほうが居心地が悪い。「俺がお前らのために一肌も二肌も脱いでやったんだぞ。どれだけ苦労して尽力したことが。それをお前は・・・少しは謙虚に感謝してみろよ」

「しているさ。だから俺はお前を殴らないでいるんだ。それでチャラにしろ」

きつぱりと言い切った大輝に、敦は奥歯を噛み締めた。大輝の目は本気だ。どれだけ自分が大輝を挑発してきたのかは敦自身がよく分っていた。意図的にやってきた部分も多々ある。大輝が望の事を予想以上に真剣に思っているらしいことを知った今は、大輝が自分を殴りたいと思う気持ちも理解できる。出来るのだが、なるべくなら痛い思いは敦もしたくはなかった。殴られずに済むのならそうであってほしい。それで、どうしても大輝の言い分を受け止めきれない。

「理不尽だ」

口を尖らせて、敦は文句を言った。

「諦める」と敦の抗議を切り捨てた大輝には、取り付く島もない。

「仕方ないな、こうなったら池戸にモーションかけてみるか」

そう言うってから、敦は何うように大輝を見た。望には近づくなど睨まれるだろうと思っていたのだが、予想に反して大輝は平然としていた。

「止めないのか？」

「それはそれで、俺にとっても都合が良いかもしれないからな」

「・・・お前って」

敦は眉を寄せる。

「以外にせこい奴だったんだな」

呆れたように言った敦の言葉に、大輝は口の端を上げた。

「せこくもなるさ」

（望が手に入るのならな）

大輝はペンを走らせる智明を呆れたように見下ろす望を見た。

望んだものは未だ手に入らない。

だが、先へと続く道だけは見えた。その道を望自身が示してくれた。

ならば、自分はその道を突き進むだけだ。

口元に笑みを浮かべる大輝を見て、敦は肩をすくめる。

この男がここまで感情を露にするとはいなかった。もっとクールな男だと思っていたのだ。遊びすぎたのかもしれないと自分の行動を少しだけ敦は後悔していた。

離れた場所にいる望を見て、敦は自重するように笑んだ。

「なあ、一つ言いたいことがあるんだけどさ」

智明は走らせていたペンを止めて、顔を上げた。

望を見上げると、昨日とは打って変わって上機嫌な望の顔がある。

「何だよ」

「約束しろ」

「何を？」

真剣な智明の目に、望は背筋を伸ばした。次に出てくる言葉を待ちながら、望は緊張を隠せないといった様子で智明を見る。

迷うように智明は視線をさまよわせ、そして改めて望を見た。

「俺の前でいちゃつくなよ」

「・・・」

望は緊張した面持ちで智明の言葉を頭の中で復唱していく。

「・・・誰と？」

「大輝だよ。ってか、それ以外ないだろ。お前にそれ以外のいちやつける相手がいたら、俺はさくらさんと別れちまうぐらい驚くぞ」

「・・・だれだよ、さくらって」

望の言葉に、智明はふやけた表情を浮かべた。嬉しそうににやつく。

「実はさー、昨日知り合ったんだ。なんと！看護師だぞ。白衣の天使ってやつ。クールで冷たい目がこう、俺のハートを驚つかみって感じでさ」

うつとりと目を細めた智明だったが、すぐに話がそれってしまった事に気が付いた。

「俺のことは良いんだよ。分ったか？約束しろよ」

「・・・」

望は首を傾げる。さくらさんの存在が頭から離れないのか、その前の智明の発言は綺麗に忘れていたようだった。

智明は深くため息を付くと、口調を強めてもう一度言った。

「俺の前で大輝といちゃつくなよ！」

「・・・！？」

望はようやくといった様子で智明の言葉を理解した。見る間に顔を赤らめていく。

「な、・・・なにをつ、俺は別に・・・」

もじもじと手先をいじりながら望はぼやく。その様子がすでに乙女のように、智明は軽い眩暈を感じていた。

「お前らのことは認めてやるけど、それでもまだ俺には男同士ってのには抵抗があるんだよ。っていうか、人前でいちゃつく普通のカップルも俺は嫌いなんだ。いちゃつくなら二人っきりのときにするべきだろ。甘くて濃い時間は二人っきりのときだろ！」

「いや、だから俺たちは別にそんなじゃないからっ」

「今がそうでなくても、この先は分らないだろ」

すでにいちやついているとしか思えない言動が見受けられるのだ。ここで釘を刺しておかなければ平穩な学校生活が崩れ去ってしまう。智明は保身を図る事に焦っていた。

望はまだ反論したいのか、もごもごと口を動かしている。

「なあ、望」

「・・・なんだよ」

「俺はどんな事があってもお前らをダチだと思ってるぞ」

「・・・智明」

智明の言葉に、望は目を潤ませた。

「だから」と智明は望に指を突き立てる。「俺の前では自粛しろよ！俺みたいなダチは大切にしろ！」

偉ぶって言い切る智明を前に、望の感涙は跡形もなく消えていった。

「なーに、騒いでんだ？お前ら」

いつの間にか側に来ていた敦が、智明と望を見比べる。

「何でもない」と言う智明に、敦は探るような視線を向ける。

望の横には寄り添うように立つ大輝の姿があった。

望が大輝を見上げると、大輝は優しい眼差しで望を見ていた。

（・・・うわっ）

望は慌てたように大輝から視線を逸らす。俯き、跳ね上がる鼓動を抑えようと息を止めてみたりする。

「どうした？」

すぐ側で大輝の声がして、望は頭を振った。

「何でもない！」

「そうか？」と疑うような大輝の声に、望は顔を上げる。怒っているのかと心配そうに見ると、大輝に微笑まれた。望は釣られたように笑みを浮かべる。

「そこ！」

智明の怒号に、望は肩をびくつかせた。閻魔のように顔をしかめ

た智明に気付いて、望は先ほどの智明に押し付けられた約束を思い出した。

（いちゃつくって・・・いちゃつくって・・・いちゃ・・・）

望の頭の中がパニックに陥っていく。

思わず大輝の側から離れるように身体をずらすと、大輝が望の肩を掴んできた。

「望」

気遣わしげに大輝が望の名前を呼ぶ。

それだけで、望の鼓動が跳ねていく。

望は気付いていないようだ、その顔は真っ赤に染まっていた。そんな望を大輝は熱いまなざしで見つめていた。

「なあ・・・やっぱり」

ぼつりと、智明が声を漏らす。望と大輝の様子を傍目に眺めながらずきずきと痛む額に手を添える。

「いや、あれはまだだろう」

敦は唸るような声を上げた。

「・・・まだか」

「・・・まだだな」

「あれがいつまで続くんだか」

「俺はくつついた後のほうがひどくなる気がするぞ」

「マジか!？」

「だって、今であれだぜ」

敦が顎をしゃくった。

はにかんだ笑みを浮かべる望を、愛しそうに見つめる大輝。例えるのなら、桃色だ。

智明はげんなりとした表情を浮かべる。

「砂吐きそう」

「同感」

敦は深く頷いた。

「俺ら、早まったか？」

「後悔先に立たずってか」

「・・・はあ。俺の学校生活が・・・」

智明は天を仰ぐ。敦は肩を落として地を見下ろした。

「しかし」と言葉を続けて、敦は笑みを浮かべる大輝を見つめた。
敦の目にも、今の輝は浮かれているように見える。

「マジ、誰だよあれって感じじゃね？」

「だよなー、大輝があそこまで変わるとは思わなかった」

智明は深く頷いた。

「もつとクールな奴だと思っていたのに」

眉間に皺を寄せる智明。その隣りで敦も同じような顔をしていた。

「だろ？人間って怖いよな」

「ま、俺もさくらさんの前だと変わるけどな」

「誰だよ、さくらって」

「聞いて驚け！俺の愛しい恋人だ！」

「・・・ちなみに、何人いるんだよ恋人が」

「今は・・・」

「いい、いい。指折って数えるな。俺がなんだか惨めになる」

「ふふふつ、さくらさんはなー」

「聞いてねーよ」

「聞けよつ。看護師なんだよ」

「白衣の天使ってやつか」

「そうそう」

「いいなー。男のロマンだよな」

「だろー」

「病院で人目を忍んで密会とか。診察とか言って服脱がせて・・・
燃えるな」

「今度やってみるかなー」

不敵な笑みを浮かべる智明を、敦は少し嫉妬の入り混じった冷たい視線で見る。

「・・・年は？」

「37」

「・・・お前、良くそれで惚れられるよな。たつのかよ」

「余裕だな。ぜんぜん許容範囲だ」

「マジかよ。俺は完全にアウトだ」

「それって狭すぎないか？」

「お前が広すぎるんだよ！」

「そうかなー」

「駄目だ、俺、頭痛くなってきた」

「敦は頭を抱えた。」

前の前では桃色に染まった望と大輝がなにやら囁きあっている。
腐ってやがる、と悪態をつきながら、敦は二人に背を向けた。

「望、今日は放課後どうするんだ？」

「今日？何も無いからすぐ帰る」

「今日から武道館の工事が始まるんだ。部活は自主練だから早く終わりそうだから・・・」

「じゃあっ、待ってる！帰りにどっか寄って行こう！」

「ああ」

「あっ、俺CD欲しいのあったんだ」

「付き合っよ」

「ほんと？サンキュッ。・・・大輝と出歩くのも久しぶりだな」

「・・・そうだな」

「・・・うん」

「望」

「ん？」

「日曜、空いてるならどこか行かないか？」

「日曜？」

「ああ。無理なら別に・・・」

「行く！ぜんぜん空いてるから！」

「そうか。・・・良かった」

「うんっ。楽しみなな」

「そうだな」

望と大輝の会話が続いていく。

これで付き合っていないのだと真剣に思っているのは当人たちだけだった。

周囲は二人の会話を聞き取ろうと耳をそばだてていた。すでに二人が友情という境界線を越えているのだと誰もが確信していた思いを抱えている。それを知らないのも、やはり当人たちだけだ。

二人が本当の恋人になれるのは、もう少し先のこと・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5482p/>

離れるなんて言わせない！

2010年12月21日23時11分発行